



14.21  
345



始





112  
315

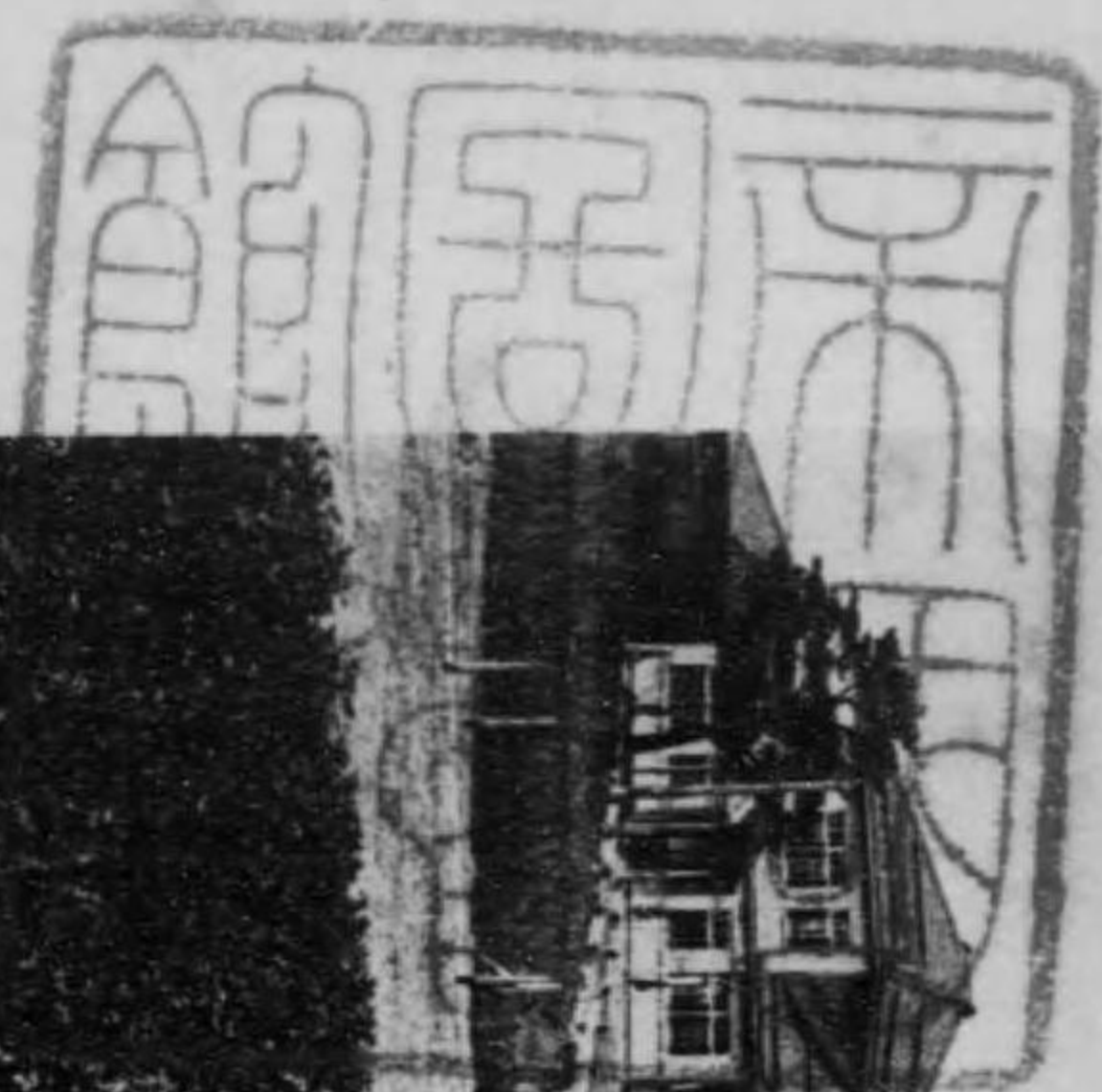
大正六年三月

秋田縣立農事試驗場一覽

秋田縣立農事試驗場

15-150





14-2A-345

大正  
6. 11. 8  
内交

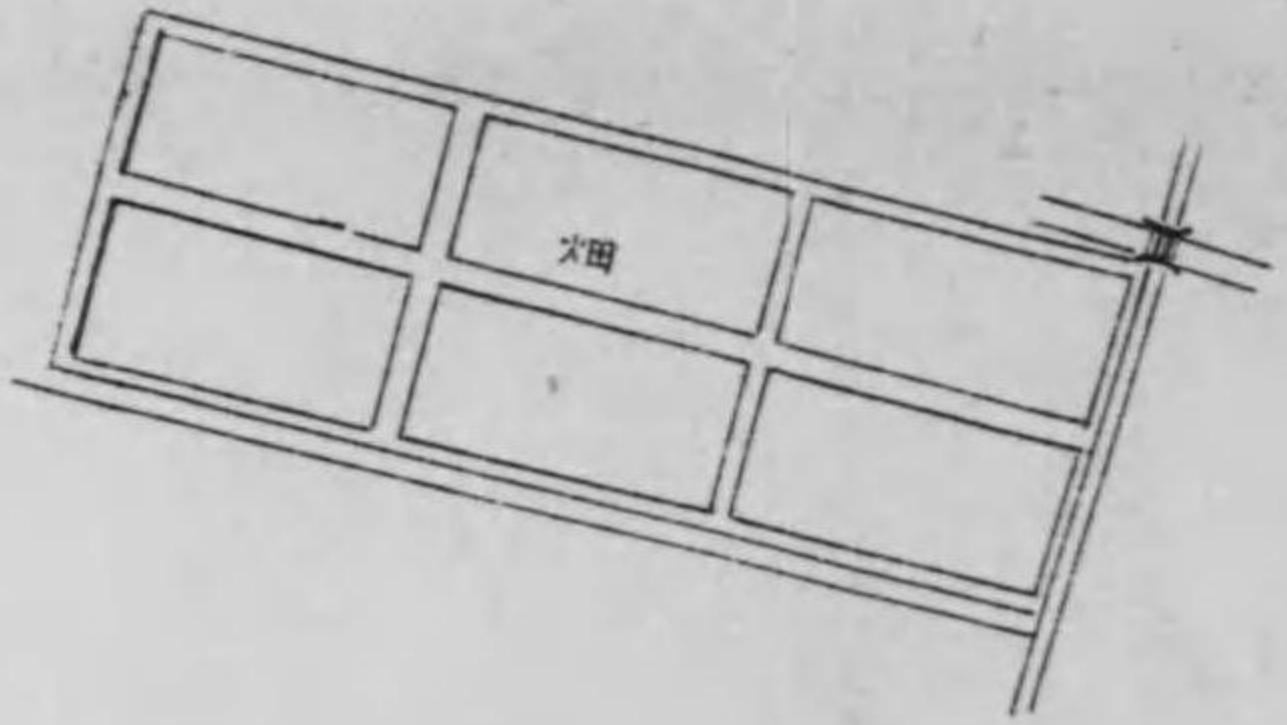
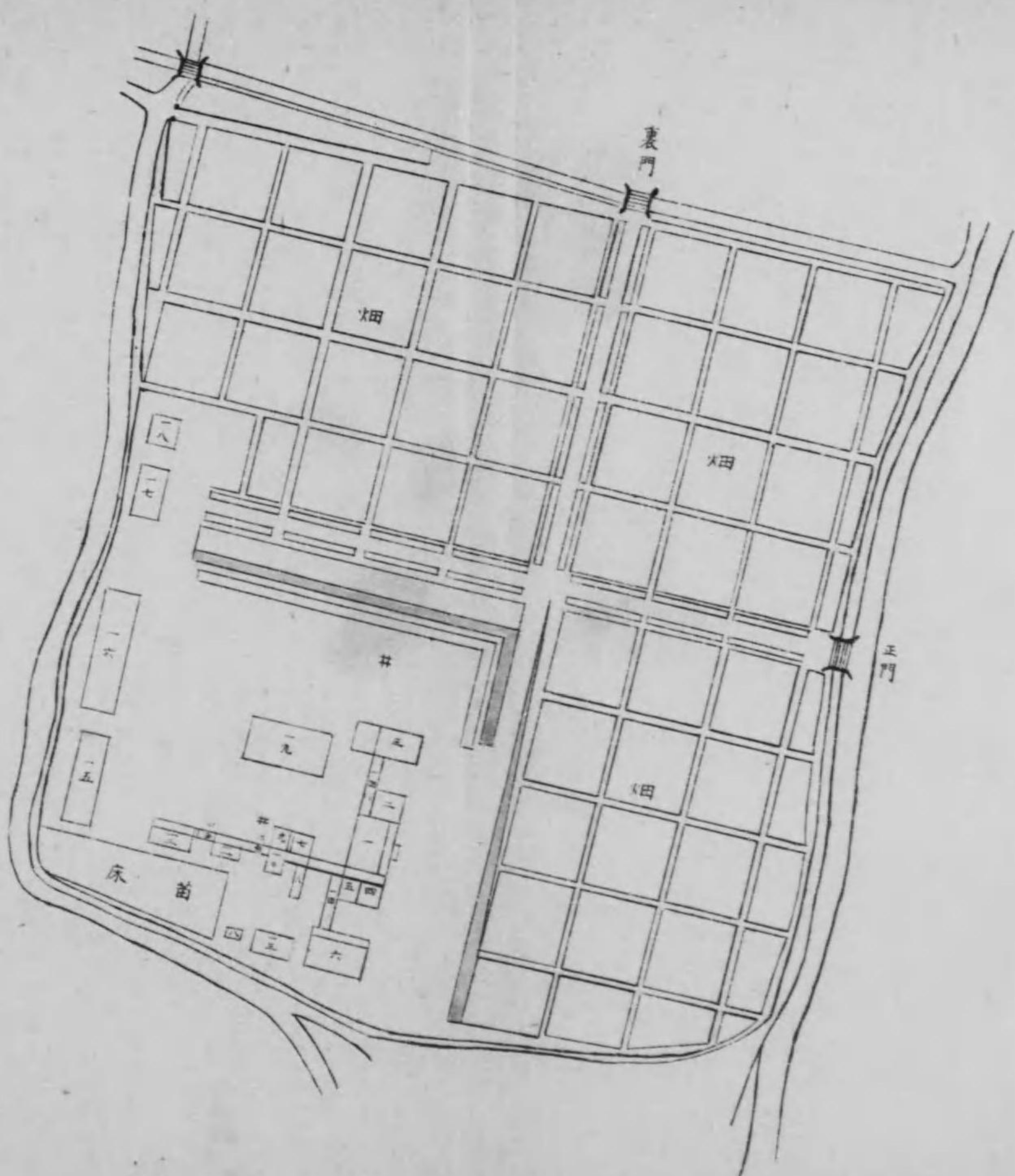






0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24

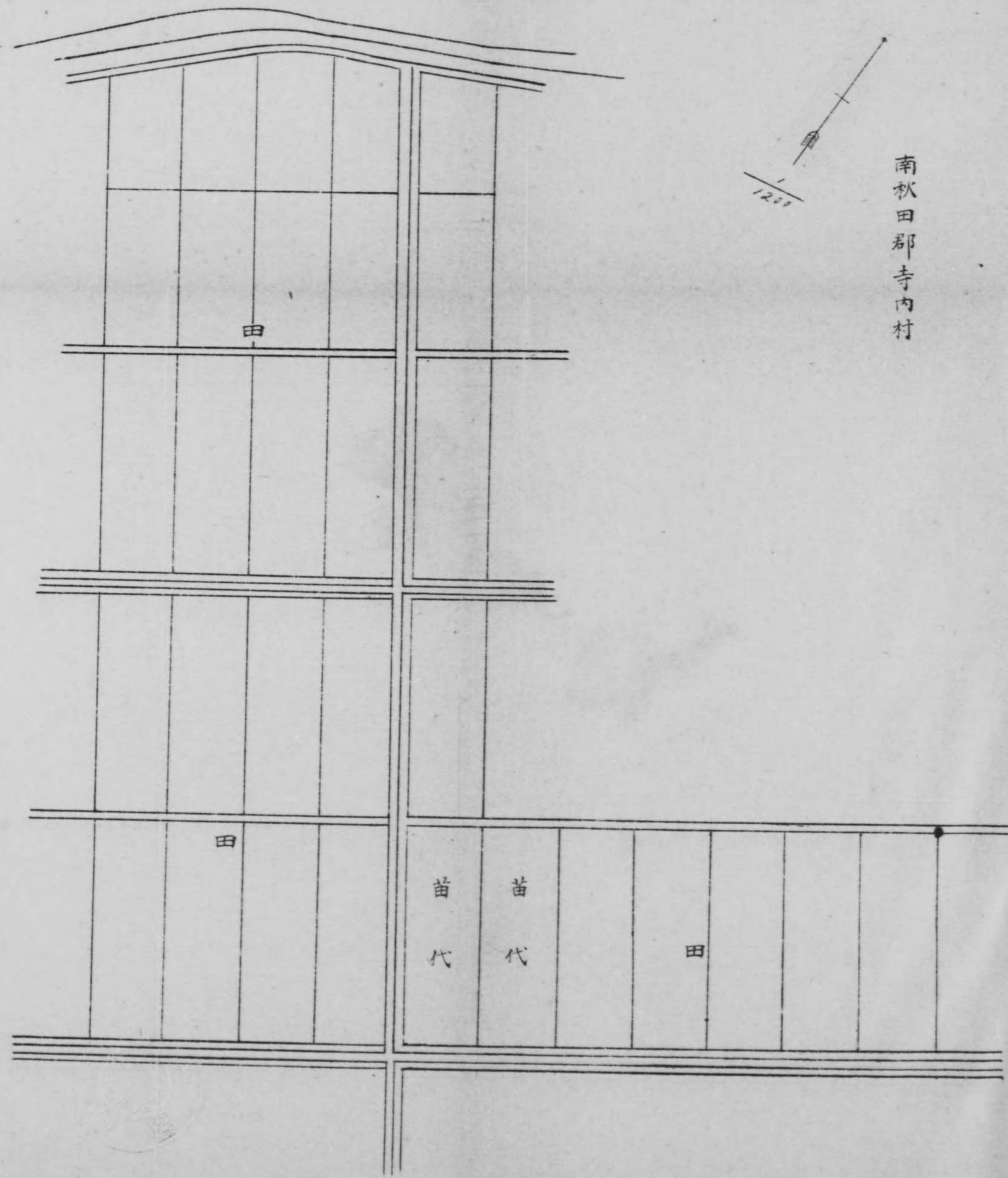
南秋田郡寺内村



例 凡

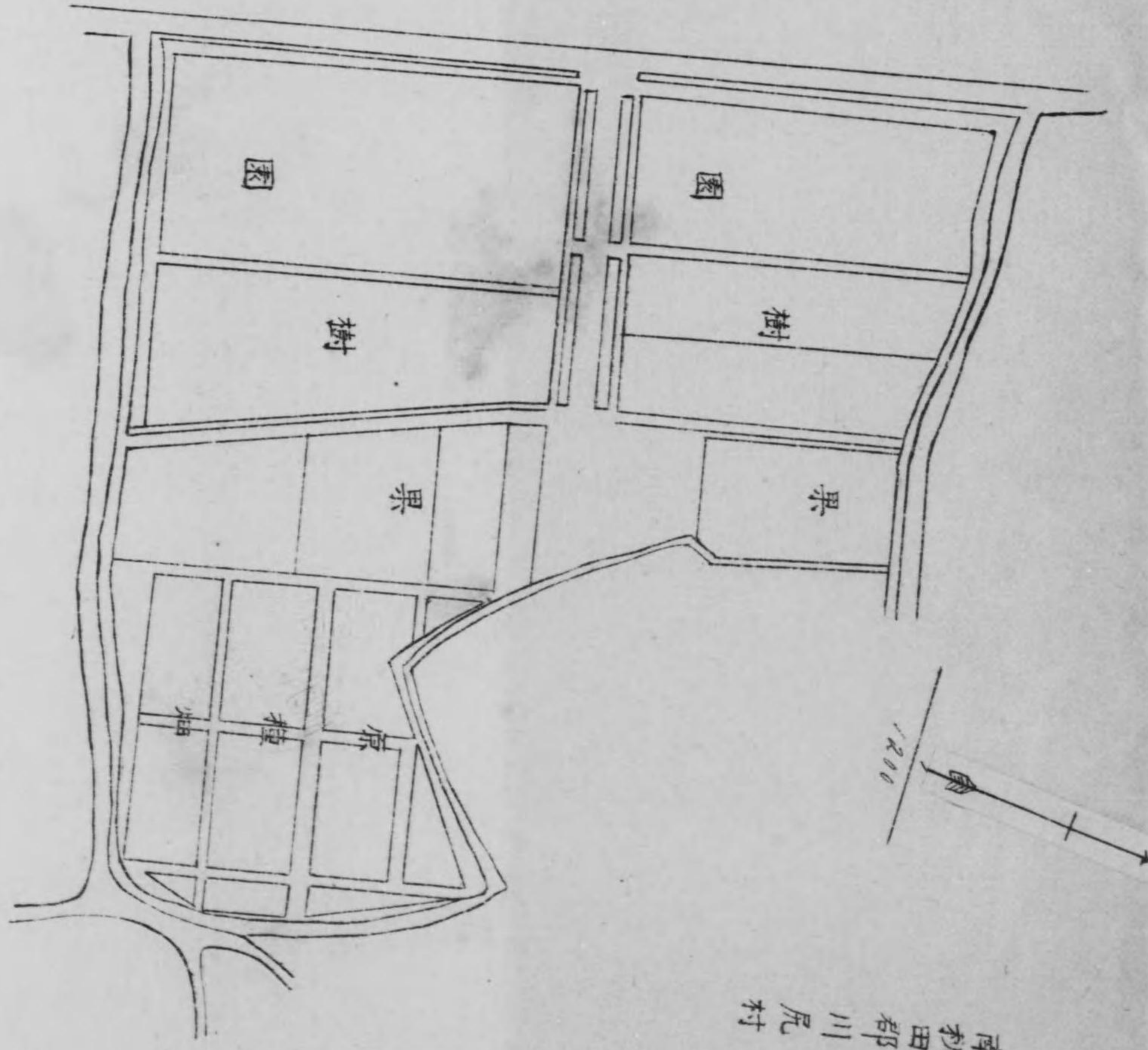
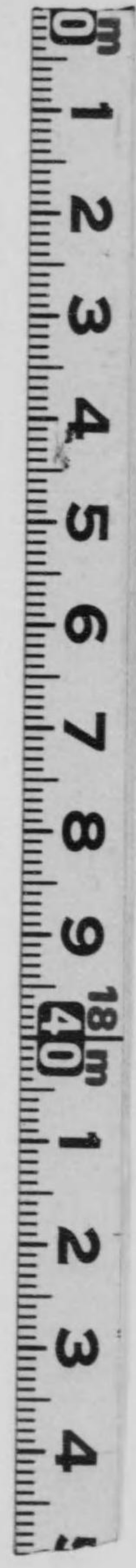
- 一 事務室
- 二 分折室
- 三 種藝室
- 四 控室
- 五 養虫室
- 六 宿直室
- 七 小便室
- 八 湯呑室
- 九 農夫舍
- 一〇 農夫舍
- 一一 物置小屋
- 一二 廊下
- 一三 板倉
- 一四 肥料舍
- 一五 肥料舍
- 一六 肥料舍
- 一七 肥料舍
- 一八 肥料舍
- 一九 肥料舍
- 二〇 肥料舍
- 二一 肥料舍
- 二二 肥料舍
- 二三 肥料舍
- 二四 肥料舍
- 二五 肥料舍
- 二六 肥料舍
- 二七 肥料舍
- 二八 肥料舍
- 二九 肥料舍
- 三〇 肥料舍
- 三一 肥料舍
- 三二 肥料舍
- 三三 肥料舍
- 三四 肥料舍
- 三五 肥料舍
- 三六 肥料舍
- 三七 肥料舍
- 三八 肥料舍
- 三九 肥料舍
- 四〇 肥料舍
- 四一 肥料舍
- 四二 肥料舍
- 四三 肥料舍
- 四四 肥料舍
- 四五 肥料舍
- 四六 肥料舍
- 四七 肥料舍
- 四八 肥料舍
- 四九 肥料舍
- 五〇 肥料舍
- 五一 肥料舍
- 五二 肥料舍
- 五三 肥料舍
- 五四 肥料舍
- 五五 肥料舍
- 五六 肥料舍
- 五七 肥料舍
- 五八 肥料舍
- 五九 肥料舍
- 六〇 肥料舍
- 六一 肥料舍
- 六二 肥料舍
- 六三 肥料舍
- 六四 肥料舍
- 六五 肥料舍
- 六六 肥料舍
- 六七 肥料舍
- 六八 肥料舍
- 六九 肥料舍
- 七〇 肥料舍
- 七一 肥料舍
- 七二 肥料舍
- 七三 肥料舍
- 七四 肥料舍
- 七五 肥料舍
- 七六 肥料舍
- 七七 肥料舍
- 七八 肥料舍
- 七九 肥料舍
- 八〇 肥料舍
- 八一 肥料舍
- 八二 肥料舍
- 八三 肥料舍
- 八四 肥料舍
- 八五 肥料舍
- 八六 肥料舍
- 八七 肥料舍
- 八八 肥料舍
- 八九 肥料舍
- 九〇 肥料舍
- 九一 肥料舍
- 九二 肥料舍
- 九三 肥料舍
- 九四 肥料舍
- 九五 肥料舍
- 九六 肥料舍
- 九七 肥料舍
- 九八 肥料舍
- 九九 肥料舍
- 一〇〇 肥料舍





南秋田郡寺内村





南秋田郡川尻村



正誤表

八〇	八〇	七八	七七	七四	六八	四八	四三	四三	四二	四二	四一	六	三	頁
六	五	四	一四	七	二	一	三	二	〇	六	五	三	二	行
ア ン ケ ル サ ム	第 三	藝 園	種 品	半 莊	グ マ リ ウ シ ン テ ン	生 早	木 灰	過 酸	燐 肥	木 料	苗 代	對 播	浴 日	地 方
ア ン ク ル サ ム	第 三	園 號	品 種	牛 莊	ク マ リ ウ シ ン テ ン	早 生	木 灰	過 酸	燐 肥	木 料	苗 代	播 日	沿 岸	地 力
一 一 二	九 四	九 三	九 三	九 三	九 一	九 一	八 七	八 七	八 六	八 六	八 二	八 〇	頁	
一 二	三	二	九	五	六	五	〇	五	一	八	六	八	行	
配 付	ニ ア ニ イ ン ト	ア チ ユ コ ミ ス	ド ワ イ ア ン ス	ラ フ ラ ン ト	キ ン グ ダ ビ ツ	三 枝 目	丸 〇 子	メ ル テ イ グ	サ ン ペ ー シ ユ	ポ ア ン ワ チ フ ル	キ ド ニ フ ル	知 ラ ン ス ト	檢 ラ ン ス ト	
配 付	點 ヲ 附 ス	ト ノ 下 ニ 切	切 點 ヲ 削 除	ラ フ ラ ン ス	キ ン グ ダ ビ ツ	三 枚 目	丸 茄 子	メ ル テ ン グ	ザ ン バ ー シ ユ	ヴ ア ン ワ チ フ ル	キ ド ニ フ ル	知 ラ ン ス ト	檢 ラ ン ス ト	



秋田縣立農事試驗場一覽

目次

第一章 沿革	一
一、位置	四
二、面積	四
三、建物	四
第二章 土質及氣候	四
第三章 諸規程	五
一、秋田縣立農事試驗場規程	八
二、同上處務細則	八
三、同上種苗配付規程	一〇
四、同上野鼠チブス菌配付規程	一四
五、同上分析規程	一七
六、同上縱覽人心得	二六
第四章 經費	三三



一、各年度經費.....三三

二、大正五年度歲出經常部豫算.....三四

第五章 事業.....三七

一、種藝部.....三六

(イ)水稻.....三六

    既往試驗事項.....三六

    同上試驗成績.....三六

    現在試驗事項.....三六

(ロ)麥類.....三六

    既往試驗事項.....三六

    同上試驗成績.....三六

    現在試驗事項.....三六

(ハ)大小豆.....三七

    既往試驗事項.....三七

    同上試驗成績.....三七

    現在試驗事項.....三七

二、園藝部.....六六

(イ)蔬菜.....六六

    既往試驗事項.....六六

    同上試驗成績.....六六

    現在試驗事項.....六六

(ロ)果樹.....六六

    現在試驗事項.....六六

三、農藝化學部.....六九

(イ)酸性土壤調査.....六九

(ロ)野鼠チブス菌培養及配付.....六九

四、病蟲部.....七〇

    既往試驗事項.....七〇

    同上試驗成績.....七〇

五、委託試驗部.....七〇

(イ)農商務省指定畑二毛作試驗.....七〇

(ロ)本場畑二毛作試驗.....七〇



四

(ハ) 泥炭地改良試験…………… 一〇五

(ニ) 果樹模範病害豫防及肥料試験…………… 一〇七

六、其他ノ部…………… 一〇九

(イ) 成績報告ノ發刊配付…………… 一〇九

(ロ) 種苗配付…………… 一一三

(ハ) 農事講習…………… 一一五

(ニ) 實地指導…………… 一二七

(ホ) 質問應答…………… 一二八

(ヘ) 縦覽人員…………… 一二九

(ト) 文書受付發送件數…………… 一三〇

第六章 職員…………… 一三一

一、歷代場長及職員轉免…………… 一三一

二、現在職員…………… 一三四

## 秋田縣立農事試驗場一覽

### 第一章 沿革

本縣農事試驗ノ濫觴ハ遠ク明治ノ初年ニ屬シ即チ其ノ創始時代ヨリ現今ノ制度ニ至ルヲ殆ソ下四十年ノ長星霜ヲ閱シ其間固ヨリ時世ノ變遷ト斯界ノ要望トニ伴レ幾多ノ消長曲折アリシト雖モ本場試驗研究ノ成績ハ常ニ本縣農事指導督勵ノ基礎ヲ爲セリ其ノ沿革ハ大略之ヲ左ノ四期ニ別ツヲ得ベシ

本縣ガ明治九年植物試驗場ヲ縣下ノ各處ニ創設シ其ノ一ヲ南秋田郡八橋村ニ設定セルハ將ニ本場ノ前身トモ稱スベク當時百般ノ作物ヲ栽培シテ其ノ適否ヲ試驗セリ後專ラ育種場トシテ種子、苗木ヲ育成シ之ヲ管内各地ニ配布スルコトトセリ其後明治十四年ニ至リ該育種場ヲ第一勸業場ト改稱シ種苗ヲ育成スル傍ラ作物ヲ試驗スルノ組織トシ廣ク内外ヨリ蒐集セル果樹、蔬菜、穀菽等ヲ栽植シ累年之ガ試驗ヲ繼續シ以テ其ノ適否ヲ探究スルニ資セリ之レ即チ本縣試作事業ノ第一期ト見ルヲ得ベシ次デ明治二十四年四月本場ハ縣會ノ決議ニ基キ秋田市上中城町(今ノ衛戍病院聯隊區司令部敷地)ニ創立セラレ縣應勸業係主管ノ下ニ專ラ穀菽(大小豆)果樹特殊樹種等ノ重要作物ニ就キ諸種ノ試驗ニ着手シ更ニ二十六年ニ至リ水稻、就中苗代及肥料ニ關





スル試験ヲ加へ爾來年々事業ヲ繼承シ來レルモ固ヨリ事創設ニ係リ各般ノ施設亦完カラザルノ憾ミ尠カラザリキ是レ即チ本縣農事試驗場ノ創立時代ニシテ試驗作業ノ第二期ニ屬ス然ルニ時世ノ進運ハ刻々トシテ農事ノ改善ヲ促カスヤ急ナリ爰ニ於テ乎明治廿七年八月政府ハ農事試驗ノ地方的中樞タルベキ研究機關ノ設立ヲ一層必要ナリト做シ農商務省訓令ヲ以テ府縣農事試驗場規程ヲ發布セラレタルニ由リ翌廿八年三月本縣訓令第五十一號ヲ以テ更ニ該規程ヲ制定セラル而シテ廿九年第十六旅團ヲ秋田市ニ設置セララルルニ當リ本場ノ敷地及試驗地ハ其ノ用地ニ充テラレタルニヨリ同年十二月河邊郡牛嶋町字牛嶋ニ移轉セリ思フニ本期ハ所謂試驗場創立後ノ整理時代ニシテ時恰モ日清ノ干戈既ニ收マリ舉國益々國威ノ發揚ト民力ノ涵養ヲ必要トスルノ時期ニ際セルヲ機トシ翌卅年ヨリ更ニ試驗業務ニ着手シ爾後昨大正四年十月ニ至ルマデ十有八年間遂年業務ヲ整理擴張シ即チ米麥菽ニ關スル各種試驗及此等良種ノ育成配付ヲ始メトシ果樹蔬菜ノ模範栽培ニ或ハ農業上各種ノ調査設計ニ或ハ農事ノ講習講話實地指導ニ或ハ肥料土壤「フオルマリン」分析鑑定及酸性土壤ノ調査ニ或ハ野鼠「チブス」菌ノ培養配付ニ或ハ畑二毛作、泥炭地、果樹ノ委託試驗ニ或ハ各種ノ審査、質問ノ應答等其ノ主要ナルモノトス是レ即チ本場創立後事業ノ整理時代ニシテ試驗作業ノ第二期ニ屬ス斯クノ如クニシテ本場ハ内ニ研鑽ノ効ヲ積ミ外ニ誘

掖ノ實ヲ擧ケ前途益々之ガ曙光ヲ放タントスルノ秋ニ際シ偶々本場所用ノ稻田ハ年々雄物川ノ氾濫ニ因リ其ノ成績ヲ空フスルノ虞アルノミナラズ廳舎極メテ狹隘ニシテ作業ニ不便ヲ感ズル事多ク殊ニ建築物ハ何レモ大破腐朽シテ修理ノ途ナク茲ニ再ビ本場ノ移轉問題ヲ提起スルニ至レリ而シテ米產ノ改良増殖ニ關スル試驗研究ハ本縣勸業ノ根本トシテ永ク本場ヲシテ敍上ノ水害地ニ置クヲ許サズ終ニ大正二年度ニ於テ後補地ヲ南秋田郡寺内村大字八橋ニ選定シ從來牛嶋ニ襲用セル田ノ大部分ヲ此地ニ假設シ以テ其ノ成績ヲ考査スル事トヒリ爾後一兩年間右試驗ヲ繼續シタルニ益々該地ニハ望ナルヲ認知セルヲ以テ大正三年ノ縣會ニ彌々本場ヲ八橋ニ移轉スベキ議案ヲ附記シ翌四年六月ヨリ地均建築工事ニ着手シ九月之ガ竣工ヲ告ゲタリ依テ十月一日ヲ以テ試驗場全部ヲ此地ニ移轉スルニ至リ本場ノ基礎爰ニ漸ク確立スルヲ得タルハ斯界ノ爲メニ洵ニ慶賀ニ堪ヘザル所ナリ然レドモ構内畑地ノ地均工事ノ如キ忽卒受負事業タリシヲ以テ蔬菜類ノ栽培ノ如キ今後兩三年ノ間地方ノ平均セララルマデ多少ノ困難アルヲ免レザルベシ又果樹園ハ構外、川尻村大字川尻約六丁ニ特設シタルモ反別狹少加之栽植果樹ノ如キ牛嶋當時ノ試驗地ヨリ移植セシモノナルヲ以テ樹勢不齊今後改善ヲ要スベキ點亦尠カラズ而シテ本場ハ今次ノ改築移轉ニ依リ形而上一段ノ刷新ヲ看ルニ至レルモ翻テ本場設立ノ素志要望ヲ顧ミ進ンテ此等各種事



業ノ充實ト完成トヲ期センニハ今後幾多ノ研鑽ト努力トヲ要スルコト勿論ニシテ將ニ本場ノ活動時代ニ達セルモノト謂フベシ是レ即チ本縣試驗作業ノ第四期トナス

一、位 置

本場ハ市外南秋田郡寺内村八橋ニアリテ秋田市ヨリ土崎町ニ通スル國道ヲ距ルコト南方約三丁秋田縣廳ヲ距ルコト西方約二十丁秋田停車場ヲ距ルコト同ジク約二十五丁ナリ

二、面 積

本場用地ハ田畑敷地合計六町五畝拾九步ニシテ其ノ内譯左ノ如シ

- 一、田 貳町七反貳畝貳拾四步
- 一、畑 貳町一反九畝步

- 一、果樹園 五反步
- 一、敷 地 六反參畝貳拾五步

三、建 物

本場建物ハ拾貳棟ニシテ建坪ハ廊下等ヲ合スレバ貳百七十四坪四合一勺ナリ更ニ之ヲ細別スレバ左ノ如シ

- 一、本 館 五拾四坪

- 一、分析室 貳拾壹坪
- 一、養蟲舍 貳拾六坪
- 一、收納舍 四十六坪
- 一、板 倉 貳拾七坪
- 一、物置小屋 八坪六合六勺
- 一、堆肥舍 貳拾坪
- 一、肥料舍 貳拾坪
- 一、農夫舍 拾壹坪五合
- 一、厩 舍 拾貳坪
- 一、宿直室及湯沸場 拾四坪貳合五勺
- 一、便 所 貳坪五合
- 一、渡り廊下 拾九坪五合

第二章 土質及氣候

本場ノ土質ハ第四紀新層壤質土トス  
氣候ハ概シテ毎年十一月ノ晩秋ヨリ翌年三月ニ至ル間ハ北西ノ大陸風最モ多ク天氣



ハ全ク此風ニ支配サレ雪霰多ク晴空ヲ現ハスコト甚ダ稀ナリ四月ニ至リ北西ノ風衰  
 フルト共ニ天氣漸ク晴燥トナリ急ニ氣温ノ高昇ヲ來シ六月初旬ヨリハ氣候濕潤トナ  
 リテ所謂梅雨期ノ特象ヲ呈スルモ之ヲ太平洋沿岸ノ地ニ比スレバ甚ダ顯著ナラズ  
 却テ此期ニ入り晴燥ノ天氣打チ續キ灌溉用水ノ缺乏ヲ告クルコト敢テ稀ナラズ  
 下旬ニ至リ本期ヲ脱スルト共ニ氣温著シク上昇シ進ンデ八月中旬ニ入り年中ノ最高  
 温度ニ達シ即チ晝夜ノ平均氣温ハ二十三、四度日中ノ最高ハ二十八、九度ノ間ヲ昇降  
 ス而シテ此間ノ天候ハ多クハ晴燥ニシテ日照時多ク稻作其他ノ農作上極メテ適順ナ  
 リト雖トモ時ニ驟雨ノ襲來アリ其後九月上旬マデハ尙高温ヲ保持シ九月中旬以降西  
 風ト共ニ氣温頓ニ降り直ニ秋冷ノ状態ニ遷リ早キハ下旬ニ於テ結霜ヲ見ルコトアル  
 モ割合ニ好晴ノ天氣多シ十一月ニ入レバ北風漸ク強ク氣温ノ下降ヲ告クルコト愈々  
 甚ダシク初冬ノ狀況ヲ呈スルニ至ル之ヲ要スルニ本縣ノ氣候ハ大陸ノ支配ヲ受クル  
 コト著大ナルヲ以テ冬季長ク夏季短クシテ陰曇ナル天氣多ク雨雪日數ハ年中ノ六割  
 四ニ達シ四季ヲ通シテ降水量尠カラズ即チ年中ノ總量ハ約一千七百九十耗ヲ示シ東  
 北地方ニアリテハ最多部ニ屬セリ今秋田測候所ノ觀測ニ係ル累年平均氣象ヲ月別ニ  
 掲クレバ左表ノ如シ

事項	月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	年
氣 壓		七六二、四〇	七六二、〇〇	七六二、四三	七六、四四	七五、八八	七五、六六	七五、六六	七五、七五	七五、九一	七六、二七	七六、三三	七六、〇四	七六〇、四四
平均氣温		(一) 一、五	(一) 一、三	二、一	八、五	一三、二	一七、九	二一、八	二二、六	一九、三	一二、五	六、九	一、四	一〇、三
最高氣温		一、八	二、四	六、二	一三、一	一七、九	二二、一	二五、七	二八、二	二四、一	一八、〇	一一、三	四、八	一四、六
最低氣温		(一) 一、五	(一) 一、四	(一) 一、八	四、〇	八、七	一四、〇	一八、四	一九、六	一四、七	七、七	二、九	(一) 一、八	六、三
濕 度		八〇、四	七九、一	七六、四	七五、三	七八、四	八二、八	八五、九	八四、七	八四、三	八二、一	七九、四	七九、七	八〇、六
降水量		一一、八	九八、七	一〇六、三	一一、四	一一、五	一四、八	一九、七	一八、七	一九、七	一六、一	一八、五	一七、四	一七八、六
蒸發量		一一、三	一、五	二、二	三、四	四、一	四、三	四、五	五、一	三、九	二、九	二、一	一、四	—
最低地温		(一) 一、五	(一) 一、三	(一) 一、三	二、〇	五、九	一一、八	一六、五	一七、五	一一、八	五、一	一、七	(一) 一、三	四、四
地中(三)		一、九	一、五	二、九	八、五	一三、四	一八、六	二二、四	二四、九	二二、七	一五、五	九、二	四、二	二、〇
地中(一)		五、六	四、三	四、〇	六、六	一〇、四	一四、三	一八、〇	二一、二	二二、三	一七、九	一三、四	八、八	二、二
温度(米)		四、八	三、九	三、〇	六、八	一〇、三	一四、五	一八、四	二一、八	二二、八	一七、七	一三、七	八、八	二、二
日照時數		四八三	六九一	一、二七〇	一、七九八	一、九三二	一、七六五	一、五九四	二、三三八	一、六九九	一、五二七	八五九	四三、七	一、六〇〇、二
曇天日數		二六三	二二〇	二〇六	一五、六	一六、二	一八、七	二〇、一	二〇、一	一三、八	一三、八	一九、四	二五、三	二三五、六
晴天日數		四、七	六、〇	一〇、四	一四、四	一四、八	一一、三	一〇、九	一〇、九	一六、二	一七、二	一〇、六	五、七	一三九、四
降水日數		二六、六	二四、〇	二二、七	一四、六	一四、四	一四、九	一七、六	一三、八	一七、〇	一八、二	二二、五	二六、九	二二二、一



備考 本表ハ三十ヶ年平均ナルモ蒸發量ハ二十三ヶ年日照時數、地中温度ハ二十  
二ヶ年、最低地温ハ十八ヶ年ノ平均ナリ

降 結 雪 霜	平 年			平 年		
	初 日	最 早 日	最 晚 日	初 日	最 早 日	最 晚 日
一〇、二三日	一〇、五日	一、一八日	四、二七日	四、一日	五、一六日	
一一、一四日	一〇、二九日	一、二、六日	四、六日	三、二二日	四、三〇日	

### 第三章 諸 程 規

#### 一、秋田縣立農事試驗場規程

- 第一條 秋田縣立農事試驗場ハ農産ノ増殖改良ヲ圖ルヲ目的トシ左ノ業務ヲ行フモ  
ノトス
- 一、作物、耕地、肥料、農具、病理、昆蟲等ニ關スル試驗
  - 二、調査、審査、設計、報告
  - 三、家畜、家禽等ノ飼養繁殖
  - 四、講習、講話、實地指導
  - 五、種苗、種禽、種豚等ノ配付

- 六、種苗、肥料等ノ鑑定
- 七、質問、應答

八、其ノ他必要ト認ムル事項

第二條 秋田縣立農事試驗場ニ左ノ職員ヲ置ク

場 長  
技 師  
技 手  
書 記

- 第三條 場長ハ技師ヲ以テ之ニ充ツ知事ノ命ヲ承ケ場務ヲ管理シ所屬職員ヲ統督ス
- 第四條 技師技手ハ場長ノ指揮ヲ承ケ技術ニ關スル場務ニ従事ス
- 第五條 書記ハ場長ノ指揮ヲ承ケ庶務、會計ニ關スル場務ニ従事ス
- 第六條 秋田縣立農事試驗場ハ必要ニ應ジ雇員ヲ置クコトヲ得
- 第七條 秋田縣立農事試驗場ハ必要ト認ムル場合ハ委託試驗ヲ行フコトヲ得
- 第八條 場長事故アルトキハ在場上席職員其ノ事務ヲ代理ス
- 第九條 場長ハ場務ニ關シ職名若クハ場名ヲ以テ農事試驗場、農事講習所、農事ニ  
關スル學校實業團體、人民及本縣管内公署等ト文書ノ往復ヲ爲スコトヲ得



但シ重要ノ事件ハ知事ノ指揮ヲ承クヘシ

第十條 場長ハ毎年施行スベキ試験ノ順序方法ヲ定メ知事ノ認可ヲ承クベシ

第十一條 場長ハ毎年一回以上試験成績ヲ審査編纂シ知事ノ認可ヲ承ケ發刊頒分スベシ

第十二條 場長ハ左ニ掲クル事項ニ就テハ便宜處分ヲナシ直チニ之レヲ知事ニ報告スベシ

一、職員ノ事務分掌

二、職員ノ管内出張

三、職員ノ病氣、忌引及除服出仕

四、雇員以下ノ採用解免

第十三條 場長ハ前年度ニ於ケル業務切程ヲ毎年四月限り之ヲ知事ニ報告スベシ

第十四條 場長ハ知事ノ認可ヲ承ケ場内處務細則其ノ他必要ナル規程ヲ設クルコトヲ得

第十五條 秋田縣立農事試驗場ハ見習生ヲ入場セシムルコトヲ得

### 一、秋田縣立農事試驗場處務細則

#### 第一章 事務分掌

第一條 本場ハ左ノ係ヲ置ク

種藝係

園藝係

農藝化學係

養畜係

病蟲係

庶務係

第二條 各係ニ於ケル事務分掌左ノ如シ

種藝係

普通作物特用作物及牧草ニ關スル左ノ事務ヲ掌ル

一、耕地、肥料、農具ニ關スル事項

二、講習、講話、傳習及實地指導ニ關スル事項

三、試験、設計書及成績書ノ調製ニ關スル事項

四、要報其ノ他印刷物ノ調製ニ關スル事項

五、質問、應答ニ關スル事項



- 六、氣象觀測ニ關スル事項
- 七、委託試驗ニ關スル事項
- 八、調査、審査、鑑定、設計報告等ニ關スル事項
- 九、種苗ノ配付若シクハ拂下ニ關スル事項
- 十、常農夫及臨時農夫ノ指揮監督ニ關スル事項
- 十一、專用物品ノ整理、保管ニ關スル事項
- 十二、陳列場整理ニ關スル事項
- 十三、參觀人ノ案内ニ關スル事項
- 十四、他係ノ主掌ニ屬セザル事項

園藝係

園藝作物ニ關スル左ノ事務ヲ掌ル

- 一、耕地、肥料農具ニ關スル事項
- 二、講習、講話及實地指導ニ關スル事項
- 三、試驗設計書及成績書ノ調製ニ關スル事項
- 四、要報其ノ他印刷物ノ調製ニ關スル事項
- 五、質問、應答ニ關スル事項

- 六、委託試驗ニ關スル事項
- 七、調査、審査、鑑定、設計報告等ニ關スル事項
- 八、種苗ノ配付若クハ拂下ニ關スル事項
- 九、常農夫及臨時農夫ノ指導監督ニ關スル事項
- 十、專用物品ノ整理保管ニ關スル事項
- 十一、陳列場整理ニ關スル事項
- 十二、參觀人案内ニ關スル事項
- 十三、他係ノ主掌ニ屬セザル事項

農藝化學係

農藝化學ニ關スル左ノ事務ヲ掌ル

- 一、土壤、肥料、農産物ニ關スル分析及鑑定
- 二、試驗設計書及成績書調製ニ關スル事項
- 三、要報其ノ他印刷物ノ調製ニ關スル事項
- 四、委託試驗ニ關スル事項
- 五、講習、講話及實地指導ニ關スル事項
- 六、調査、審査、鑑定、設計報告ニ關スル事項



養畜係

家畜及家禽ニ關スル左ノ事務ヲ掌ル

- 一、蕃殖並ニ飼養管理ニ關スル事項
- 二、試験設計書及成績書ノ調製ニ關スル事項
- 四、要報其ノ他印刷物ノ調製ニ關スル事項
- 五、質問、應答ニ關スル事項
- 六、調査、審査、鑑定、設計、報告等ニ關スル事項
- 七、種豚種禽ノ配付若シクハ拂下ニ關スル事項
- 八、専用物品ノ整理保管ニ關スル事項
- 九、參觀人ノ案内ニ關スル事項
- 十、他係ノ主掌ニ屬セザル事項

病蟲係

病理昆蟲ニ關スル左ノ事務ヲ掌ル

- 一、昆蟲飼育並ニ病蟲害驅除豫防ニ關スル事項
- 二、講習、講話及實地指導ニ關スル事項
- 三、試験設計書及成績書ノ調製ニ關スル事項

- 四、質問、應答ニ關スル事項
- 五、委託試験ニ關スル事項
- 六、調査、鑑定、設計、報告等ニ關スル事項
- 七、病蟲害標本及野鼠室扶斯菌ノ配付ニ關スル事項
- 八、専用物品ノ整理保管ニ關スル事項
- 九、陳列場ノ整理ニ關スル事項
- 十、他係ノ主掌ニ屬セザル事項

庶務係

庶務會計ニ關スル左ノ事務ヲ掌ル

- 一、場長印及場所ノ管守ニ關スル事項
- 二、職員ノ服務ニ關スル事項
- 三、文書ノ往復及淨書ニ關スル事項
- 四、文書ノ保存ニ關スル事項
- 五、諸帳簿及圖書類ノ整理保管ニ關スル事項
- 六、業務功程ノ編纂報告ニ關スル事項
- 七、記録ノ編纂ニ關スル事項



- 八、小使ノ指揮監督ニ關スル事項
  - 九、場内ノ警備取締ニ關スル事項
  - 十、豫算、決算其ノ他出納ニ關スル事項
  - 十一、物品ノ保管出納及購入賣却ニ關スル事項
  - 十二、建物ノ建築及修繕ニ關スル事項
  - 十三、土地建物保管ニ關スル事項
  - 十四、其ノ他庶務會計ニ關スル一切ノ事項
  - 第三條 各係ニ主任一名及係員若干名ヲ置ク
  - 第四條 主任ハ場長ノ命ヲ承ケ其ノ係ニ屬スル事務ヲ掌ル
  - 第五條 係員ハ主任ヲ補任シ其ノ係ニ屬スル事務ヲ分擔ス
- 第二章 處務順序**
- 第六條 本場ノ事務ハ總テ場長ノ裁決ヲ經テ施行スルモノトス
  - 第七條 本場ニ到達シタル文書ハ庶務係ニ於テ之ヲ收受シ親展書ヲ除クノ外直チニ之ヲ開封シテ其ノ件名姓名月日番號等ヲ收受簿ニ記入シ文書ニ番號シ收受月日ヲ附シ收受簿ト共ニ場長ニ提出スベシ
  - 但シ官報其ノ他各地試驗成績報告雜誌ノ如キハ回覽印ヲ押捺シ回覽ニ供スベシ

- 第八條 收受ノ文書ニ場長認印ノ上ハ各主任ヘ交付濟ノ證トシテ各係主任ノ檢印ヲ押捺セシムベシ
- 第九條 交付ヲ受ケタル文書ニシテ至急ヲ要スルモノハ速ニ之ヲ處理シ然ラサル議ノハ三日以内トス
- 尙ホ延期ヲ要スルモノハ事由ヲ具シ期日ヲ限リ場長ノ許可ヲ承クベシ
- 第十條 交付ヲ受ケタル文書ハ總テ處分案ヲ付シ首席者及係員ニ合議シ場長ノ決モヲ請フベシ
- 但シ計算ニ關スルモノハ首席ニ於テ尙精覈之ヲ調査スベシ
- 第十一條 前條ニヨリ合議ヲ受ケタルトキハ調査ノ爲メ特ニ時日ヲ要スルモノヲ除クノ外遅クモ當日中ニ閱了回付スルヲ要ス
- 第十二條 同一事件ニ關スル處分案ハ其ノ關係書類ヲ順次添付シ顛末ヲ知り易カラシムベシ
- 第十三條 場長不在中代理者ニ於テ裁決スル文書ニシテ場長ノ親閱ヲ要スト認ムルモノハ代理者ニ於テ其ノ文書ニ要親閱ト朱書スベシ
- 第十四條 決裁濟ノ文書ニシテ發送ヲ要スベキモノハ遅クモ退場時間前庶務ニ回付スベシ



第十五條 發送ノ文書ハ(文書ニ附屬スル別冊、別紙圖畫ノ類各主任ニ於テ淨書添付スベシ)庶務係ニ於テ淨書ノ上發送簿ニ其ノ件名發送先月日番號等ヲ登記シ文書ニ其ノ番號ヲ記入捺印ノ上即日之ヲ發送スベシ

但シ文書幅狹シ即日其ノ發送ヲ了ル能ハザルトキハ緩急ヲ計リ場長ノ認許ヲ得テ翌日迄テ留置スルコトヲ得

第十六條 發送文書ハ通例場名ヲ用ヒ事ノ重大ナル場合ニハ場長名ヲ用フベシ

第十七條 發送文書ニ親展又ハ書留郵便等特別ノ取扱ヲ要スルモノハ原議者ニ於テ其ノ旨欄外ニ朱書スベシ

第十八條 處分ヲ完決シタル文書ハ各部類ヲ分チテ各係ニ於テ之ヲ編纂シ庶務係ニ回付スベシ其ノ編纂ハ第十九條ノ簿冊類別ニ依ル

第十九條 本場備付ノ簿冊ノ類別ハ左ノ如シ  
但シ保存年限ハ秋田縣處務細則ノ例ニ依ル

- 試驗原簿
- 試驗設計案
- 收受件名簿
- 發送件名簿

業務日記

業務豫定簿

氣象觀測簿

種苗其ノ他配付簿

臨時人夫雇人簿

出張命令簿

職員名簿

出勤簿

來觀人名簿

令達簿

事務日誌

宿直日誌

宿直通知簿

縣會計規則ニ關スル諸帳簿

其ノ他必要ナル簿冊

第三章 服務心得



- 第二十條 職員ハ出勤時間ヲ嚴守シ昇場ノ上ハ直チニ出勤簿ニ捺印シ然ル後各擔任ノ業務ニ就クベシ
- 第二十一條 公務其ノ他ノ事故ニ依リ遲參シタルトキ理由ヲ場長ニ開陳ノ上出勤簿ニ捺印スベシ
- 第二十二條 各自擔任ノ事務ニ就キ其ノ責ニ任スルハ勿論其ノ擔任外ノ事務ト雖モ相幫助シ場務ノ進捗ヲ期スベシ
- 第二十三條 擔任外ノ事務ト雖モ場長ノ指揮アルモノハ直チニ之ニ從事シ處辨ノ後主任ニ通知スベシ
- 第二十四條 服務時限ハ閣令ノ定ムル所ニ依ルト雖モ事務繁劇ノトキハ執務時間外若シクハ休日ト雖ドモ昇場執務スベシ
- 第二十五條 退場時間ヲ過クルト雖トモ場長在場ノ時ハ特ニ承認ヲ得ルニアラザレバ退場スル事ヲ得ズ
- 第二十六條 所勞疾病其ノ他ノ事故ニ依リ欠勤又ハ遲參スル者ハ登場時間迄ニ場長ニ届出ツベシ
- 但シ取扱中ノ事務ニシテ至急ヲ要スルモノアルトキハ其ノ始末ヲ具シテ處分ヲ請フベシ

- 第二十七條 前條疾病ノ爲メ欠勤一週間以上ニ及ブトキハ醫師ノ診斷書ヲ添へ届出テ爾後七日毎ニ同様ノ手續ヲナスベシ
- 第二十八條 執務時間中退場セントスルトキハ其ノ旨場長ニ届出ツベシ
- 第二十九條 退場ノ際ハ各其ノ管理スル所ノ文書物品等遺漏ナク所定ノ場所ニ收メ散逸ナカラシムベシ
- 第三十條 忌服ヲ受ケタルトキ又ハ亡父母ノ法會若シクハ祭日ニ當リ休暇セントスルトキハ登場時間マデニ場長ニ届出ツベシ
- 第三十一條 歸省慕參父母ノ病氣看護又ハ轉地療養ノ爲メ旅行ヲナサントスルトキハ旅行先及往復滞在ノ日數ヲ具シ願出ツベシ其ノ轉地療養ニ係ルモノハ醫師ノ診斷書ヲ添付スベシ
- 第三十二條 出張ヲ命ゼラレタルトキハ發着ノ月日ヲ命令簿ニ記入スベシ
- 第三十三條 出張ニ際シ取扱中ニ係ル事務ニシテ措キ難キモノハ其ノ始末ヲ具シテ場長ノ指揮ヲ承クベシ
- 第三十四條 出張ノ際ハ出發前其ノ日割ヲ定メ場長ニ提出シ置クベシ若シクハ出張先ニ於テ日割變更ヲ要スルトキ又ハ豫定ノ日割以内ニ用務ヲ終了スルコト能ハザルトキハ其ノ旨届出ツベシ



第三十五條

出張先ニ於テ命令ニ臨時ノ處分ヲ要スルカ又ハ疾病等止ムヲ得ザル事故生シタルトキハ其旨ヲ記シ場長ノ指揮ヲ俟ツベシ

但シ事項急速ニ出テ其ノ手續ヲナシ能ハザルトキハ其ノ旨居出ツベシ

第三十六條

出張ノ職員歸場シタルトキハ五日以内ニ其ノ業務功程若シクハ取調ノ要領ヲ書面ニテ場長ニ復命スベシ

但シ時宜ニ依リ口頭ヲ以テ復命スルコトヲ得

第三十七條

新任職員ハ拜命後五日以内ニ履歷書二通ト宿所届テ差出スベシ但シ轉居、改氏名ノトキハ直チニ届出ツベシ

第三十八條

轉任又ハ退職免職ノ場合ハ其擔任事務ヲ辭令書受領ノ日ヨリ五日以内ニ引繼クベシ

第三十九條

近火其ノ他ノ事變アルトキハ速ニ出場警戒防禦ニ從事スベシ

第四章 宿直心得

第四十條

技手、書記、雇員ノ内一名宛輪番ニ宿直スルモノトス

第四十一條

宿直ニ當ルモノハ庶務係ニ於テ豫メ宿直通知簿ニ月日氏名ヲ記シ承印ヲナサシムベシ

第四十二條

宿直ハ退場時限ニ始マリ翌日昇場時限ニ終ルモノトス

但シ休暇當日ハ昇場時限ヨリ翌日ノ昇場時限迄トス

第四十三條

宿直ニ當リ疾病其ノ他事故アルトキハ各自相對ヲ以テ代勤スルコトヲ得

第四十四條

宿直員ノ取扱フベキ事務ハ左ノ如シ

一、場内一切ノ取締ニ關スル事項

一、印箱、鍵箱ノ管守並ニ公文書類等ノ取締ニ關スル事項

第四十五條

到達シタル文書物品ハ之ヲ宿直日誌ニ登録シ左ノ各項ニヨリ取扱フベシ

一、場長及場宛ノ電報並ニ至急ノ表記アル封書ハ開封ノ上直チニ當該本人ニ送付スベシ

一、親展ノ電報及至急親展ノ表記アル文書ハ封緘ノ儘直チニ當該本人へ送付スベシ

一、通常ノ文書及物品ノ翌日庶務係(翌日休日ナル時ハ交代員)ニ引繼クベシ

第四十六條

宿直員ハ宿直中ニ處理シタル事項ハ遺漏ナク宿直日誌ニ記載シ署名捺印ノ上翌日場長ノ檢閲ヲ經ルモノトス



第四十七條 宿直員管理ノ物品ハ遺漏ナク次番ニ繼引クヘシ其品ハ左ノ如シ

- 一、宿直日誌
- 一、郵便電信用切手類
- 一、郵便切手受拂簿
- 一、電信及至急公翰送付簿
- 一、印箱及鍵箱

第四十八條 場内又ハ附近ニ火災其ノ他非常ノ事變アルトキハ宿直員ハ之レヲ場長ニ急報シ傍ラ臨機ノ處置ヲナスベシ

### 三、秋田縣立農事試驗場種苗配付規程

第一條

秋田縣立農事試驗場ニ於テ生産シタル種苗ハ左ノ各號ノモノニ配付ス

- 一、縣農會、郡農會、又ハ農業者ニシテ良種ノ育成配付ヲ目的トスルモノ
- 二、農業團體學校若クハ農業者ニシテ試作ヲ目的トスルモノ

第二條

配付スヘキ種苗ノ種類左ノ如シ

- 一、原種、水稻、麥類、大豆、馬鈴薯
- 二、普通種苗、前號其ノ他ノ種苗

第三條 配付スベキ種苗ノ種苗數量及出願期日ハ之ヲ公示ス

第四條 普通種苗ノ配付數量左ノ如シ

- 一、種子ハ一作物ニツキ三種以內ニシテ一種一升以下
- 二、苗ハ十本以內又ハ一畝歩以下ニ要スル本數

第五條 本規程ニヨリ配付ヲ受ケムトスルモノハ別記様式ニ依リ願書ヲ縣立農事試驗場長ニ差出スベシ

第六條 種苗ノ配付出願カ配付豫定數量ヲ超過シタルトキハ縣立農事試驗場長ハ之ヲ限定シ又ハ配付ヲ爲サザルコトアルベシ

第七條 縣立農事試驗場長配付ヲ許可シタルトキハ其種類數量引渡ノ時期ヲ出願者ニ通知ス

第八條 引渡ノ場所ハ秋田縣立農事試驗場トス但シ希望ニ依リ運賃荷造費ヲ徴シ送付スルコトアルベシ

第九條 出願者第七條ノ指定限内ニ受領ヲ爲サザルトキハ配付ノ許可ハ其ノ効力ヲ失フ

第十條 本規程ニ依リ配付ヲ受ケタルモノハ其ノ作物ノ收穫後一ヶ月以內ニ其ノ成績ヲ秋田縣立農事試驗場長ニ報告スベシ



(願書式)

原種 配付願

(用紙半紙罫紙)

種類品種及數量

育成地ノ所屬郡市町村名

育成及配付ノ方法

受領ノ場所

右配付相成度此段相願候也

年 月 日

縣郡(市)町村大字番地

何 某 印

秋田縣立農事試驗場長殿

種苗 配付願

(用紙半紙罫紙)

種名

品種名

數量

受領場所

右試作致度候條配付相成度此段相願候也

年 月 日

縣郡(市)町村大字番地

何 某 印

秋田縣立農事試驗場長殿

#### 四、秋田縣立農事試驗場野鼠室扶斯菌配付規程

第一條 秋田縣立農事試驗場ニ於テ培養スル野鼠室扶斯菌ハ本規程ニヨリ配付ス

第二條 野鼠室扶斯菌ノ配付ハ野鼠被害地一區域五町步以上ノ田畑ノ驅除ヲ行ハントスル場合ニ限ルモノトス

但シ官衙及農學校ヨリ出願又ハ地勢上特ニ一區域ヲナシタル箇所ニ付テハ五町步以下ト雖モ請求ニ應ズルコトアルベシ

第三條 野鼠室扶斯菌ハ無償ニテ配付ス

但シ該容器ハ使用後直チニ秋田縣立農事試驗場ニ返付スベシ

前項荷造及運搬ニ關スル一切ノ費用ハ出願者ノ負擔トス

第四條 野鼠室扶斯菌ノ配付ヲ受ケントスルトキハ其願書ニ左ノ事項ヲ記シ郡市長



ヲ經テ秋田縣立農事試驗場長ニ差出スベシ

但シ官衙及農學校ノ出願ニ付テハ郡市長ノ經由ヲ要セズ

一、被害地名 (町村字等)

一、驅除スベキ區域ノ反別

一、被害作物

一、被害ノ時期及狀況

一、野鼠室扶斯菌使用ノ豫定期日

第五條 野鼠室扶斯菌ノ配付ハ出願ノ順序ニ依リ之レヲ定ム

但シ出願者定數ナルトキ又ハ業務ノ都合ニ依リ室扶斯菌ノ培養ヲナサザルトキハ

配付セザルコトアルベシ

第六條 野鼠室扶斯菌ノ配付ヲ取ケタルモノハ其ノ使用期日方法其ノ他使用上必要

ナル事項ニ付秋田縣立農事試驗場長ノ指示監督ヲ受クベシ

第七條 配付ヲ受ケタル野鼠室扶斯菌ヲ使用シタルモノハ六ヶ月以内ニ其ノ狀況及

成績ヲ秋田縣立農事試驗場長ニ報告スベシ

### 五、秋田縣立農事試驗場分析依頼規程

第一條 秋田縣立農事試驗場ハ本縣内ニ居住スル者ノ出願ニ依リ土壤、肥料「フオ

ルマリン」其ノ他農事ニ關スル物料ノ分析鑑定ノ依頼ニ應ス

第二條 秋田縣立農事試驗場ニ於テ事故アルトキ若クハ分析ノ必要ナシト認メタル

トキハ其ノ出願ヲ許可セス

第三條 分析手数料ハ之ヲ徴收セス

第四條 分析ヲ出願セントスル者ハ第一號様式ノ願書ヲ秋田縣立農事試驗場長ニ差

出スベシ

前項ノ願書ニ添付スヘキ供試品ノ數量ハ左ノ區別ニ依ルヘシ但シ必要ト認ムルト

キハ其ノ數量ヲ増加セシムルコトアルヘシ

甲 土 壤

五百匁

乙 肥 料

一、諸粕、糠、乾魚、鳥尿ノ類

百五十匁

二、骨粉、骨炭、骨灰、石灰、草木灰類

百五十匁

三、人造肥料

二百匁

四、堆肥ノ類

五百匁

五、液肥ノ類

二升



丙「フオルマリソ」

一 封

三〇

前各號以外ノ供試品ノ數量ハ其ノ都度秋田縣立農事試驗場ニ於テ之ヲ指示ス  
第五條 秋田縣立農事試驗場ニ於テ第四條ノ出願ヲ許可セサルトキハ出願人ニ其ノ旨通知シ

前項ノ場合ニ於テ供試品ハ其ノ通知ヲ發シタル日ヨリ二週間以内ニ請求アリタルモノニ限り運賃先拂ヲ以テ之ヲ返付ス

第六條 秋田縣立農事試驗場ハ分析結了シタルトキハ第二號様式ノ成績證ヲ出願人ニ交付ス

第一號様式

分析依頼願

- 一、供試品名
- 二、製造地名若シクハ採取地名
- 三、製造者ノ氏名若シクハ名稱又ハ採取者ノ氏名
- 四、分析ヲ要スル成分

右定性(又ハ定量)分析御依頼致度候條御許可相成度此段相願候也  
年 月 日  
郡市町村大字番地

職業 何 某 印

秋田縣立農事試驗場長殿  
第二號様式

第 號

證

- 一、供試品名
- 製造地名若クハ採取地名
- 製造者ノ氏名若クハ名稱又ハ採取者ノ氏名

住 所

出願人 氏 名

- 一、何々(定性)分析成績
- 一、何々(定性)有無又ハ痕跡  
(定量ハ現品百分中)
- 一、何々 幾 何

右者出願人ヨリ當場ニ提出シタル供試品ニ就キ施行シタル分析ノ結果タルコトヲ證ス

三一



年月日

秋田縣立農事試驗場長技師 氏名 (印)  
 分析主任秋田縣立農事試驗場(技師) 氏名 (印)

六、秋田縣立農事試驗場縱覽心得

本場ニ就キ實地試驗作物等ヲ縱覽セシムル爲メ明治二十八年三月三十一日本縣告示第五十五號ヲ以テ秋田縣立農事試驗場縱覽人心得ヲ發布セラレタルガ故ニ參考ノ爲メ左ニ掲グ

一、秋田縣立農事試驗場ハ晝間ヲ限り年中休ミナク廣ク衆庶ノ縱覽ヲ許スト雖モ或ハ場務ノ場合ニヨリコレヲ謝絶スルコトアルヘシ

一、前項縱覽人在場中ハ一々場員ノ差圖ニ隨ヒ又ハ其許諾ヲ得ルニアラザレバ試作物等ニ手ヲ觸ルベカラズ

一、白痴、醉狂者其ノ他試驗圃場等ヲ暴害スルモノハ縱覽ヲ謝絶シ又ハ退場ヲ命スルコトアルベシ

第四章 經費

本場創立ノ當時ヨリ現在ニ至ルマデ年々ノ經費ハ左ノ如シ

一、各年度經費

年次	經常部	臨時部
明治二十八年年度	一、〇四九、五八四	八一、九三一
同 二十九年年度	二、二〇〇、四三四	八二八、二八九
同 三十年年度	三、八五五、五八四	二九五、一四〇
同 三十一年年度	五、四九五、七四七	三七六、〇二五
同 三十二年年度	五、八七三、〇七九	一六四、二二〇
同 三十三年年度	八、四二〇、八八九	六七一、〇九五
同 三十四年度	八、一五二、四六一	一三一、一二一
同 三十五年年度	七、六二九、三八二	六〇、〇〇〇
同 三十六年度	五、三八八、五二八	
同 三十七年度	五、〇三三、四七六	
同 三十八年度	九、六五九、六五九	二四一、七六〇



年次	經常部	臨時部
明治三十九年度	九、四〇八、〇〇〇	
同 四十年度	一、八四六、〇〇〇	
同 四十一年度	一四、七一五、八九五	
同 四十二年度	一五、三三四、七七二	
同 四十三年度	八、〇九五、八九一	
同 四十四年度	八、三九八、一九〇	
大正元年	八、二二四、四〇〇	
同 二年	一〇、六二九、〇〇〇	
同 三年	一〇、九四六、〇〇〇	
同 四年度	一二、四三四、〇〇〇	
		三、四六、〇〇〇
		二六八、〇〇〇
		一、四九九、二四六

二、大正五年度歲出經常部豫算  
一金壹萬參千百九拾八圓

經常部

三四

金五千參百四拾八圓  
內

第一目俸給

金參千五百圓  
金千五百九拾六圓  
金貳百五拾貳圓  
金參千四百貳拾六圓  
內

技師俸給  
技手俸給  
書記俸給  
第二目雜給

金百五拾四圓  
金參百貳圓  
金千貳百拾壹圓  
金九百八拾貳圓  
金八百壹圓  
金七圓  
金百四拾九圓  
金拾圓  
金參千六百八拾八圓

小使及給仕給  
農夫給  
臨時農夫給  
技師旅費  
技手旅費  
小使被服費  
職員賞與  
小使以下賞與  
第三目場費

三五



内

- 金四百七拾五圓
- 金參百五拾七圓
- 金貳百拾四圓
- 金百八拾參圓
- 金百參拾九圓
- 金六拾六圓
- 金八百參拾貳圓
- 金五百拾圓
- 金參百圓
- 金六百拾貳圓
- 金六百七拾六圓

内

- 金貳百貳拾貳圓
- 金九拾八圓
- 金參百五拾六圓

第四目委托試驗費

- 栽培費
- 備品費
- 消耗品費
- 印刷費
- 通信費
- 運搬費
- 化學試驗費
- 原種田畑費
- 家畜費
- 雜費
- 畑二毛作試驗費
- 泥炭地改良試驗費
- 果樹試驗費

内 金七百參拾圓

内

- 金百八拾圓
- 金七拾參圓
- 金四拾貳圓
- 金貳百貳圓
- 金貳百參拾參圓
- 金參拾圓

第五目米麥原種圃費

- 雇員給
- 常農夫給
- 臨時農夫給
- 備品費
- 消耗品種
- 第十八項修繕費
- 修繕費

第五章 事業

既ニ沿革ニ述ベタル如ク本場ハ創立以來時代ノ趨勢ニ伴ヒ業務ニ多少ノ變遷アリト雖モ年ト共ニ規模ヲ擴張シ殊ニ活動期ニ入レル八橋へ改築移轉後ノ如キ内外ノ業務一時ニ輻輳ヲ極メ其繁激亦昔日ノ比ニアラズ故ニ業務ノ進捗ヲ講センガ爲メ現今左ノ五部ニ各専門ノ技術者ヲ配シ以テ其分擔業務ノ完成センコトヲ期セリ而シテ調査



研究ノ結果其ノ成績ノ明瞭ナルモノハ已ニ業ニ之ヲ發表シテ農家ノ指針タラシメタルモノ少カラズ

- 一、種 藝 部
- 二、園 藝 部
- 三、農 藝 化 學 部
- 四、病 蟲 部
- 五、庶 務 部

今左ニ各部ニ屬スル既往ノ試験事項、其主ナル成績並ニ現ニ施行シツツアル試験項目ヲ列擧セバ次ノ如シ

一、種 藝 部

由來本縣ハ米作ヲ以テ名アリ從テ之ガ改良發達ニ關スル試験ハ本場ノ最モ重キヲ置ク所ニシテ創立以來斯種試験事項ノ多キ實ニ茲ニ因ス翻テ畑作ノ狀況ヲ案ズルニ其利用方法未タ幼稚ニシテ之ガ改善ハ亦本縣農界ノ一緊喫ノ要務タルヲ失ハス然ルカ故ニ本場ハ稻作ニ關スル試験研究ト相俟テ畑作ノ試験ヲ重ネ隨時之ガ成績ヲ發表スルノ方針ヲ執リ來レリ而シテ創立以來既往ニ於ケル試験項目ヲ擧クレバ

(イ) 水 稻

既往試験項目

試験項目	試 驗 區 別	試 驗 年 數
(一) 水稻肥料試驗	施肥期ヲ插秧前及插秧後トシ窒素磷酸加里ノ量ヲ一ニセリ	明治廿六年ヨリ 二ケ年
(二) 水稻三要素試驗	三要素(完全區)區其一要素ヲ缺ケルモノトナシ比較セリ	同 上
(三) 苗代比較試驗	改良苗代、新苗代及在來苗代ヲ比較ス	同年ヨリ四ケ年
(四) 苗代跡插秧試驗	改良苗代及新苗代跡ニ對シ一株三本一坪三十株及一株六本一坪四十二株ニ區別シ三石糶及糠白川ヲ用フ	同年ヨリ八ケ年
(五) 直 播 試 驗	浸水發芽ノモノ、無浸水ノモノヲ苗代ニ播ケルモノト無浸水ノモノヲ本田ヘ直播トナシ比較セリ	明治二十七年 明治二十七年ヨリ 六ケ年
(六) 播 種 量 試 驗	三合、五合、八合、一升ノ區別ニヨル	明治二十七年ヨリ 六ケ年
(七) 品 種 試 驗	縣ノ内外各品種ニ付其優劣ヲ比較ス	同年ヨリ繼續中
(八) 株 數 試 驗	壹框(一坪四分ノ一)ニ付苗數ヲ十二本トシ九、十二、十六、二十株ノ五區ニ付比較セリ	明治二十七年 明治二十七年ヨリ 六ケ年
(九) 本 數 試 驗	壹框(一坪四分ノ一)ニ付苗數ヲ四、八、十二、十六、二十本ノ五區ニ付シ	明治二十七年 明治二十七年ヨリ 六ケ年
(一〇) 干 魚 試 驗	參區トシ一區ハ堆肥ヲ用ヒ他二區ハ干魚一反歩ニ付五貫ト七貫トヲ以テセリ	明治二十七年 明治二十七年ヨリ 四ケ年
(一一) 重過磷酸用量試驗	一反歩參貫、四貫、五貫ノ區別トス	明治二十七年ヨリ 四ケ年
(一二) 深耕淺耕試驗	深サ三寸、五寸、七寸ノ參區ニ分ツ	明治二十八年ヨリ 八ケ年



試験項目	試験	區別	試験年數
(一) 撰種試験	鹽水浮種、鹽水撰種、水撰及唐箕撰種ノ四區分ニ分ツ		明治二十八年ヨリ 同二十九年ヨリ 五ヶ年
(二) 浸種試験	無浸水、七日浸水、彼岸ヨリ土用迄浸水ノ三區ニ分ツ		同 同上
(三) 萌芽試験	種蒔、萌芽ノ兆アルモノ、普通萌芽セルモノノ三區ニ分ツ		明治二十九年ヨリ 同二十年ヨリ 二ヶ年
(四) 播種期試験	四月二十日、四月三十日、五月十日ノ參區ニ分ツ		同上
(五) 苗床日數試験	三十日苗、四十日苗、五十日苗ノ參區ニ分ツ		明治二十八年ヨリ 同二十九年ヨリ 三ヶ年
(六) 糠糠粕、鱒子魚比較試験	同價トシテ肥効ヲ比較ス		明治二十九年ヨリ 同二十年ヨリ 二ヶ年
(七) 肥料比較試験	糞、人糞、油粕、米糠、鷄糞、青刈首着、青刈大豆、青刈 豌豆、堆肥ヲ以テス		明治二十九年ヨリ 同二十年ヨリ 三ヶ年
(八) 除草試験	一回ヨリ四回マテ參區ツツチ蟹瓜打チ行ヘルモノト否ラザル モノニ付比較ス		明治二十九年ヨリ 同二十年ヨリ 三ヶ年
(九) 一株數試験	三本、四本、六本、七本、八本、九本、十本、十一本、十二 本、十五本、二十本ニ分ツ		明治二十九年ヨリ 同二十年ヨリ 三ヶ年
(十) 一步株數試験	三十、四十二、五十四、八十、百株ニ付比較ス		同上
(十一) 苗代肥料試験	新苗代ニ對シ人糞尿ト葉灰トヲ施用シ用量ニヨリ九區ニ區別 ス		明治三十年ヨリ 同二十九年ヨリ 二ヶ年
(十二) 苗代跡磷酸加用試験	無磷酸以外ニ重過磷酸ヲ二、三、四、五、實ノ五區ニ分ツ		明治三十年ヨリ 同二十九年ヨリ 二ヶ年
(十三) 一株數對苗數試験	株數ハ一坪三十六、四十二、四十九、五十六、六十四、八十株 ニ分チ之ニ苗數、四、五、六本トセリ		明治三十年ヨリ 同二十九年ヨリ 二ヶ年

(十四) 干濕田比較試験	同一耕種法ノ下ニ比較セリ		同年ヨリ六ヶ年
(十五) 豊凶考照試験	年々同一耕種法ニ依リ比較セリ		同年ヨリ繼續中
(十六) 苗代灌水法試験	灌水チ深水、淺水ノ二種トシ比較セリ		同三十一年ヨリ 五ヶ年
(十七) 苗代磷酸加用試験	人糞尿五升、蒸灰一升ノ外ニ過磷酸石灰チ拾匁ヨリ五十匁マテ 五區及無シノ六區ニ分ツ		同年ヨリ二ヶ年
(十八) 對播種期	播種期ヲ四月二十八日、五月五日、同十二日、同十九日、六月十 二日トシ苗床日數チ三十、四十、五十日苗ヲ以テス		同年ヨリ六ヶ年
(十九) 苗代日數試験	鷄糞、米糠、骨粉、骨灰、トーマス、沈澱磷酸、重過磷酸石灰ノ七 區ニ付比較ス		明治三十一年
(二十) 同價磷酸肥料試験	無窒素、無磷酸、無加里窒素磷酸加里、無肥料ノ五區ニ付比 較ス		同年ヨリ五ヶ年
(二十一) 三要素試驗	三十四品種チ一本植トシ其特性ヲ調査ス		同年ヨリ三ヶ年
(二十二) 三要素適量試験	窒素區、磷酸區、加里區ヲ各七區ニ分チ九百匁ヨリ貳貫四百 匁マテ用フ		同年ヨリ四ヶ年
(二十三) 肥數對種類試験	庄内外七種ニ付肥料チ五割減普通肥料五割増トシテ行ヒタリ		同三十二年ヨリ三 ヶ年
(二十四) 撰種試験	唐箕撰、水撰、鹽水撰ニ付比較セリ		同三十一年ヨリ 二ヶ年
(二十五) 收穫期試験	早刈、中刈、晚刈ノ三區ニ付行ヒタリ		同三十三年ヨリ 三ヶ年
(二十六) 厩肥試驗	本場厩肥及農家ノ厩肥ニ付比較セリ		明治三十三年ヨリ 三ヶ年
(二十七) 元素窒質肥料同價試験	餅ノ粕、油粕、人糞尿、大豆、鷄糞ニ付行フ		同年ヨリ五ヶ年
(二十八) 磷酸質肥料同價試験	基本肥料、過磷酸、重過磷酸、トーマス骨粉ニ付行フ		同年ヨリ四ヶ年



試驗項目	試 驗 區 別	試驗年數
(一)肥料用量試驗	最通肥料、五割減、二倍量ニ付比較セリ	同年ヨリ六ヶ年
(二)質窒素肥料試驗	厩肥、人糞尿、餅粕、人尿、油粕、鷄糞、大豆、青草、硫酸ニ付行ヘリ	同上
(三)排水試驗	穗揃期、收穫期、及子實ノ稍固マリタル時ノ三期ニ分ツ	同三十四年ヨリ
(四)灌深淺試驗(框)	深サ五分、一寸、二寸ノ三區ニ分チテ行ヒ	同三十九年ヨリ
(五)肥料配合試驗(框)	基本(厩肥三百貫)肥料ニ過磷酸加用、木炭加用ノ三區トセリ	同上
(六)施肥期試驗	人糞尿ヲ元肥一番草、二番草ノ三期ニ付試ミタリ	同上
(七)石灰窒素肥料試驗	硫酸アンモニア、トノ肥料ニ付磷酸及加里ノ種類ヲ異ニシ比較セリ	同上
(八)苗特別育成法試驗	普通苗ト特別育成苗トナ比較セリ	明治四十二年ヨリ
(九)磷酸肥料試驗	酸性土壤ニ付堆肥ニ加用スベキ酸肥料ヲトマス、過磷酸及重過磷酸石灰加用ニ分ツ	同四十二年ヨリ
(十)石灰用量試驗	堆肥用量ト過磷酸ノ用量ヲ異ニシ之ニ石灰ヲ二十貫乃至百貫マテ十八區ニ分ツ	同四十二年ヨリ
(十一)土質對磷酸肥料試驗	強埴土、埴土、壤土、砂土ニ付磷酸ノ肥料ヲ比較セリ	同年ヨリ六ヶ年
(十二)稻架ノ種類試驗	從來ノ大稻架、同小稻架、繩大稻架及同小稻架ニ付試驗セリ	明治四十三年
(十三)品種改良試驗	早稻關山外四種中稻龜尾外四種晚稻豊後外二種ニ付行ヘリ	同上

試驗項目	試 驗 區 別	試驗年數
(一)土壤ノ理學的改良試驗	百分中粗土ヲ二〇乃至九〇トシ之ニ對シ砂土一〇乃至八〇ヲ配合シ六區ニ分チタリ	同年ヨリ三ヶ年
(二)肥効試驗	堆肥トノ肥効ヲ過酸及石灰ヲ加用シ三區ニ分チテ比較セリ	大正元年ヨリ二ヶ年
(三)石灰窒素肥料試驗	硫酸アンモニアト窒素成分ヲ同一トシ過磷酸硫酸加里木炭ヲ加ヘ四區ニ分チ比較セリ	大正元年
(四)泥炭地改良試驗	泥炭ニ砂及粘土ヲ加ヘ耕耨ヲ三寸、五寸、七寸ニ區別シ拾六區ニ付比較セリ	同年ヨリ二ヶ年
(五)腐植質土改良試驗	原土ニ砂、粘土、石灰ヲ加ヘ更ニ過磷酸其他腐肥ヲ加ヘ拾四區ニ付比較セリ(ホヅト)	明治四十四年ヨリ三ヶ年
(六)病害抵抗力試驗	耐病性品種(龜ノ尾、關山)ニ付施肥量ヲ増減シテ行ヒタリ	大正二年ヨリ三ヶ年

既往ノ主ナル試驗成績

(一)苗代跡挿秧試驗 (自明治三十年至明治三十三年 四個年平均)

本試驗ハ苗代跡ヲ利用センガ爲メ從來農家ガ休閑ノ習慣タル在來苗代並ニ新ニ設定シタル新苗代ニ對シ稻ヲ挿秧シ其結果ヲ究メントスルニアリ但シ供試品種ハ三石糯及名古屋白トス

區 別	三十一年	三十二年	三十三年	平均收量
新苗代跡	一、五一九	一、五〇〇	二、〇三二	一、九一五
通苗代跡	〇、八九五	二、五二五	一、七八二	一、八一八



備考

本試験ハ年ニヨリ施肥量ト一坪株數ヲ異ニシ試験方法一準ナラザルモ新苗代及通苗代ノ跡共相應ノ收量ヲ得タリ故ニ苗代跡ハ徒ラニ休閑セシムルヨリハ強健ナル種類ヲ撰ミ施肥管理ノ方法ニ注意セバ前述ノ遺利アルノミナラズ敢テ翌年ノ苗ノ生育ニ障害ナキガ如シ

(二)播種量試験(自明治二十八年至明治三十二年五個年平均)

本試験ハ播種量ノ多寡ハ稻ノ生育及收量ニ如何ナル關係アルヤヲ試ミントスルニアリ

區別	明治二十八年	明治二十九年	明治三十年	明治三十一年	明治三十二年	平均收量
參合播	二、三三五	二、二六五	一、一六八	一、七六三	一、八五四	二、一七六
五合播	二、二一〇	三、一四〇	一、二三六	一、五三四	一、九五四	二、二二三
八合播	二、二六二	三、〇三三	一、二七三	〇、九九〇	一、七五七	一、九八八
壹升播	一、八五二	三、一九九	一、〇七〇	〇、六七一	一、八三九	一、八五五

前表中二十八、九年ノ兩年ハ廣山田村三十年ヨリ三十二年迄ハ牛嶋町、試験田ノ成績ニシテ之ヲ平均スルニ參合時ヲ適良トシ播種量ヲ加フルニ從ヒ漸次苗軟弱惹テ收

量ヲ減スルモノノ如シ

(三)品種試験(自明治二十八年至大正四年二十一年間繼續)

本試験ハ地方的適良ノ品種ヲ撰擇センガ爲メ本場創立以降之ガ試験ニ着手シ既ニ明治二十八年ヨリ大正四年迄ニ試験ニ供セル品種數ハ實ニ百六拾壹種ノ多キニ上レリ而シテ累年比較調査ノ結果現ニ有望トシテ參個年以上繼續シツアル品種ノ成績ハ左ノ如シ

品 種 名	出 穗 期	成 熟 期	草 丈	莖 數	品 質	累年平均(試驗年數)(反當支米收量)
一 早生大野	八月九日	九月一日	三、一六	一〇本	中ノ上	一、八六(四)
二 關山	八月九日	九月一日	三、四三	九	中ノ中	一、八七(七)
三 國輝	八月九日	九月一日	三、三一	三	中ノ上	一、六五(五)
四 福嶋	八月二〇日	九月九日	三、四五	一〇	中ノ中	一、八五(七)
五 五郎兵衛	八月二二日	九月二〇日	三、二三	二	中ノ中	一、九八(七)
六 白川	八月二三日	九月二三日	三、二三	九	中ノ上	一、九一(七)
七 五郎左衛門	八月二二日	九月二〇日	三、二九	三	上ノ上	一、七〇(四)



品名	出穂期	成熟期	草丈	莖數	品質	累年平均(試験年數)反當玄米收量
八 畿内七拾壹號	八月三日	九月三日	二、八四	三本	中ノ下	一、七〇九(四)
九 豊國	八月二日	九月三日	三、二九	二本	上ノ中	一、九三八(三)
一〇 河邊糯	八月二日	九月三日	三、〇五	二本	中	一、六三二(七)
一一 白髭	八月二日	九月三日	三、二八	二本	上ノ下	一、五四九(六)
一二 カナゴ	八月二日	九月三日	三、二五	二本	上ノ中	一、七三四(四)
一三 臺灣早生	八月二日	九月三日	三、三五	二本	中ノ中	一、五二五(六)
一四 庄内	八月二日	九月三日	三、四三	二本	中ノ上	一、七六六(七)
一五 澤麻糯	八月二日	九月三日	三、四〇	二本	中	一、七三七(六)
一六 長者坊主	八月二日	九月三日	二、七七	二〇	上ノ中	一、六三一(四)
一七 畿内六拾四號	八月二日	九月三日	二、六四	二五	中ノ上	一、八二二(三)
一八 龜ノ尾	八月二日	九月三日	三、四三	一五	上ノ中	一、九〇二(七)
一九 穂長	八月二日	九月三日	三、三九	一四	下ノ中	一、八三三(七)
二〇 信洲金子	八月二日	九月三日	三、六一	一七	上ノ上	一、八〇二(七)

品名	出穂期	成熟期	草丈	莖數	品質	累年平均(試験年數)反當玄米收量
二一 大(石川縣)	八月二日	九月三日	二、五八	九	中ノ下	一、八四九(五)
二二 四國坊主	八月二日	九月三日	三、二五	八	下ノ中	一、二六三(四)
二三 仙臺坊主	八月二日	九月三日	三、一四	二五	中ノ下	一、八七七(七)
二四 大(水場)	八月二日	九月三日	二、六六	二〇	下ノ上	二、一四四(七)
二五 大(本縣)	八月二日	九月三日	二、八三	一四	下ノ中	一、八七〇(五)
二六 畿内六拾六號	八月二日	九月三日	二、七七	二二	上ノ下	二、二七〇(四)
二七 豊後	八月二日	九月三日	三、〇〇	一五	下ノ中	一、九七三(七)
二八 畿内九拾九號	八月二日	九月三日	二、八〇	一四	中ノ中	一、二五三(三)
二九 畿内六拾號	八月二日	九月三日	二、六〇	一七	中ノ上	一、五三七(四)
三〇 庄内早生	八月二日	九月三日	三、三九	一三	中ノ上	一、五二九(七)
三一 津輕田子	八月二日	九月三日	三、五〇	二	中ノ上	一、三六九(五)

備考  
 累年平均收量(七)トアルハ最近七個年ノ内最豊(明治四十二年)最凶(大正二年)ノ二  
 個年ヲ除キ残リ五個年ノ平均收量ヲ示セルモノナリ(但シ七個年未滿三個年以上ノ  
 モノハ試験年數ニテ除シタル平均收量ナリ)



又一株秧數ハ生早大野ヨリ五郎左衛門及庄内早生津輕田子ハ六本植豊國ヨリ穗長マデハ五本植信州金子ヨリ幾内六拾號迄ハ四本植トセリ而シテ調査事項ハ累年平均收量ヲ除キ何レモ大正四年ノ成績ヲ示セリ

(四) 耕勸深淺試驗(自明治三十一年至明治三十五年 五個年平均)

本試驗ノ目的ハ耕勸ノ深淺ニヨリ稻作ニ及ボス關係ヲ知ラントスルニアリ但シ供試品種ハ名古屋白トス

區別	明治三十一年 (玄米收量)	明治三十二年 (玄米收量)	明治三十三年 (玄米收量)	明治三十四年 (玄米收量)	明治三十五年 (玄米收量)	平均收量
耕勸參寸	一、五七四	二、〇〇六	二、二一八	二、E113	一、六二五	一、六六五
耕勸五寸	一、六〇〇	二、〇六五	二、E101	二、E111	一、八二九	二、〇六五
耕勸七寸	一、五二二	二、〇八五	二、E110	二、E117	二、〇七四	二、一五二

前表ニ依レバ收量ノ最モ多キハ七寸區ニシテ五寸區之ニ次キ三寸區最モ劣レリ而シテ之ヲ各年ノ成績ニ徴スルモ略々其軌ヲ一ニセリ

(五) 撰種試驗(自明治二十八年至明治三十二年 四個年平均)

本試驗ノ目的ハ種子撰擇ノ如何ハ其生育及收量ニ及ボス關係ヲ試ミントスルニアリ

區別	明治二十八年	明治二十九年	明治三十一年	明治三十二年	平均收量
唐箕撰	二、〇四〇	一、五六六	一、五五〇	一、六七〇	一、七〇七
水撰	二、二八〇	一、八二〇	一、六〇四	一、七三一	一、八五九
鹽水撰	二、四一五	一、八六〇	一、五七五	一、七四一	一、八九八

前表ニ依レバ鹽水撰種ノ收量最モ多シテ水撰之ニ次キ唐箕撰最モ劣レリ而シテ鹽水撰種ト唐箕撰種トノ收量ノ差ハ平均ニ於テ壹斗九升壹合ニシテ又以テ種子撰擇ノ忽諸ニ付スベカラザルヲ証スルニ足ル

(六) 六萌芽試驗(自明治二十九年至明治三十三年 五個年平均)

本試驗ノ目的ハ萌芽ノ程度ヲ異ニセル種子ガ苗ノ生育並ニ其後ノ收量ニ如何ナル關係アルヤヲ試ミントスルニアリ

區別	苗ノ長サ (插秧當時)	反當 廿九年三十一年	米收量 廿九年三十一年
一 場播(萌芽セザルモノ)	五、五寸	一、八〇〇	一、八二五
二 萌芽ノ兆アルモノ	五、五寸	一、七四九	一、九六六
三 萌芽三四分ニ伸ビタルモノ	七、〇寸	一、七七〇	一、二六五



前表ニ依レバ插秧當時ニ於ケル苗ノ生長ハ第三區即チ萌芽三、四分ノモノ最モ佳良ニシテ第二區之ニ次キ揚播區ハ最モ短少ナルノ觀アルモ翻テ其後ノ生育及收量ニ至ツテハ寧ロ正反對ノ現象ヲ呈シ即チ揚播區最多收量ニシテ第三區第二區順次ニ減少ナルヲ示セリ之ニ依テ之ヲ觀レバ從來農家ノ慣行タル芽出播ハ揚播ニ對シ反テ其不利ナルヲ瞭知スルヲ得ヘキ歟

七除草試驗(自明治三十四年三箇年平均)

本試驗ノ目的ハ除草ニ蟹爪ヲ使用スルト否トノ得失及除草回数ヲ異ニシタル際ノ稻作ニ及ボス關係ヲ試ミントスルニアリ

區別	明治三十四年 (反當支米收量)			明治三十五年 (反當支米收量)			明治三十六年 (反當支米收量)			平均收量
	蟹爪使用 參回除草	四回除草	貳回除草	參回除草	四回除草	貳回除草	參回除草	四回除草	貳回除草	
手取り 參回除草	二、一〇二	二、三二五	二、四八八	一、三〇七	一、五五四	一、八三〇	一、九五四	一、九七三	一、七八九	
手取り 四回除草	二、〇〇七	二、〇〇七	二、〇〇七	一、一二五	一、一二五	一、八四五	一、八四五	一、八四五	一、六五九	
手取り 參回除草	二、〇八五	二、〇八五	二、〇八五	一、二七八	一、二七八	一、九二二	一、九二二	一、九二二	一、七六二	

區別	明治三十四年 (反當支米收量)	明治三十五年 (反當支米收量)	明治三十六年 (反當支米收量)	平均收量
四回除草	二、一五四	一、四九七	一、九六九	一、八七三
五回除草	二、三一〇	一、八一六	二、一一〇	二、〇七九

前表ニヨレバ一番除草ニ蟹爪ヲ使用シ而カモ其回数ヲ増セルモノ成績最良ニシテ之ヲ手取りヲナセルモノニ比シ收量多キノミナラズ除草回数ヲ減スルノ利益アリ

八乾濕田比較試驗(自明治三十三年三箇年平均)

本試驗ノ目的ハ乾田水田トニ於ケル收量ノ多寡及米質ノ優劣ヲ比較セントスルニアリ

區別	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	平均反當收量
乾田	一、八八二	一、九一七	一、七九二	一、八六四
濕田	一、九七〇	一、五八八	一、六四二	一、七三三

前表ニ依レバ乾田ハ其年次ノ淺キニ拘ハラズ濕田ニ比シ其收量遙カニ多ク且ツ各年ヲ通ジテ其米質亦乾田ニ於テ優良ナルヲ見ル

九苗代肥料試驗(自明治三十二年三箇年平均)



本試験ノ目的ハ苗代田休閑ノ弊ヲ矯メンカ爲メ從來乾田ナリシ本田ヲ新ニ苗代トシ之ニ對スル施肥量ノ適否ハ苗ノ性狀及收量ニ如何ナル關係アルヤヲ試ミントスルニアリ

區別	苗ノ長サ (參ケ年平均)	出穂期	反當玄米收量 (三ヶ年平均)
第一 人糞 五畝	五、七六	八、二二日	一、四三四
第二 人糞 四畝	六、二三	八、一九	一、五一二
第三 人糞 五畝	五、九三	八、一八	一、五六八
第四 人糞 四畝	五、八〇	八、一七	一、五三八
第五 人糞 四畝	六、四六	八、一八	一、五五二
第六 人糞 五畝	六、六六	八、一七	一、五六九
第七 人糞 六畝	七、〇三	八、一六	一、五九九
第八 無肥	五、〇〇	八、二二	一、三三六

前表ニ依レバ苗ノ生長及反當收量共人尿六升區最良ヲ示シ人尿五升區之ニ亞ケリ故ニ苗代肥料ハ一坪ニ付人糞尿四、五升ヲ以テ略ホ適量トナスモノ、如ク之が施肥量

ノ多少ニ依リ苗ノ生育及出穂期ニモ遲速ヲ來スニ似タリ但シ出穂期ハ三十二年ノ調査トス

(一〇) 苗代灌水深淺試驗 (自明治三十一年至明治三十五年 五個年平均)

本試験ハ苗代灌漑水ノ深淺ヲ異ニシテ養成シタル苗ノ生育及收量ノ優劣ヲ比較セントスルニアリ

區別	苗ノ長サ	反當玄米平均收量
深水 (參寸) 在來農家ノ灌水法	六、九四	一、七八二
淺水 (壹寸)	五、四一	一、八一六

前表ニ依レバ苗ノ伸長ハ灌水ノ深淺ニ比例スルノ觀アルモ其發育軟弱ニ失シ實際收量ニ至リテハ淺水トシテ育成スルモノニ利アルヲ示ス

(一一) 播種期對苗床日數試驗 (自明治三十二年至明治三十六年 五個年平均)

本試験ノ目的ハ播種ノ早晚及其苗床日數ハ插秧後ニ如何ナル影響アルヤヲ調査シ當地方ニ於ケル播種ノ適期ヲ知り且ツ適當ナル苗床日數ヲ定メントスルニアリ



區	別	插	秧	期	平均反當玄米收量	
四月十四日	五	十	日	苗	六月三日	一、八五〇
	六	十	日	苗	六月三日	一、七六四
	七	十	日	苗	六月三日	一、四六八
四月二十一日	五	十	日	苗	六月二日	一、七五四
	六	十	日	苗	六月二日	一、五〇四
	七	十	日	苗	六月二日	一、二九六
四月二十八日	四	十	日	苗	六月七日	一、七五四
	五	十	日	苗	六月七日	一、五八三
	六	十	日	苗	六月七日	一、二三二

前表ニ依レバ當地方ニ於ケル播種期ハ四月中、下旬插秧期ハ六月上旬ヲ適當トナス  
 (一)二三要素試驗(自明治三十三年至明治三十五年三個年平均)  
 本試驗ノ目的ハ本場試驗田ニ於テ稻作ニ對シル三要素ノ効驗ヲ知ラントスルニアリ  
 但シ施肥量ハ一反歩ニ付各要素一貫五百匁ニシテ窒素ハ硫酸安母尼亞、過磷酸

石灰、加里ハ炭酸加里ヲ以テセリ

區	別	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	平均反當收量
一	無肥料	一、八一六	二、五九六	一、四〇八	一、八〇八
二	無窒素(磷酸加里)	二、一四〇	二、六六九	一、五五五	二、〇九七
三	無磷酸(窒素加里)	二、三三九	二、七七九	二、〇三八	二、三八五
四	無加里(窒素磷酸)	二、二七六	二、一九九	二、〇七八	二、三四〇
五	窒素磷酸加里	二、五〇二	二、八四五	二、一三九	二、四九五

前表ニ依レバ窒素最モ必要ニシテ加里、磷酸、順次之ニ亞グラ知ラン

(一)二三要素適量試驗(自明治三十三年至明治三十五年三個年平均)

本試驗ノ目的ハ本場試驗田ニ於テ稻作ニ對シ三要素ノ施用スベキ適量ヲ知ラントス  
 ルニアリ但シ窒素ハ硫酸安母尼亞、磷酸ハ過磷酸石灰、加里ハ炭酸加里ヲ以テセリ

區	別	反當	玄米	收量	平均收量
一	無窒素	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	
		一、九六一	二、六一〇	一、五四三	二、〇三八



區別	反當米收量			平均收量	
	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年		
窒素區	窒素一貫二百匁	二、三六四	三、〇一五	一、八三三	二、四〇四
	窒素一貫五百匁	二、三六九	三、〇九〇	一、八九六	二、四五二
	窒素一貫八百匁	二、四〇四	三、〇三八	二、〇七三	二、五〇五
	窒素一貫八百匁	二、四七九	二、七四三	一、九六六	二、三九六
	窒素二貫四百匁	二、六〇四	二、七八九	二、一三六	二、五〇〇
	無酸	二、六四九	二、八八七	二、一一二	二、五四九
	無酸	二、二七〇	二、九七三	一、九〇八	二、三八四
	磷酸九百匁	二、四四九	三、〇四二	二、〇四一	二、五一一
	磷酸一貫二百匁	二、五一二	三、〇〇三	一、八六八	二、四六一
	磷酸一貫五百匁	二、五九九	二、九四五	一、九一三	二、四八六
	磷酸一貫八百匁	二、四一三	三、〇五〇	一、九七七	二、四八〇
	磷酸二貫四百匁	二、三七七	三、〇六〇	一、九八一	二、四七三
	磷酸二貫四百匁	二、五四〇	二、八一八	二、〇一九	二、四五九

區別	反當米收量			平均收量	
	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年		
加里區	無加里	二、〇七五	二、五四三	一、六九八	二、一〇五
	加里九百匁	二、四七七	二、七二八	二、一一三	二、四三九
	加里一貫二百匁	二、四七一	二、七四四	二、一六六	二、四六〇
	加里一貫五百匁	二、五七七	二、七九二	二、一三二	二、五〇〇
	加里一貫八百匁	二、五三〇	二、八三一	二、二一七	二、五二六
	加里二貫四百匁	二、五八六	二、八四三	二、一二七	二、五一九
	加里二貫四百匁	二、五六〇	二、九六〇	二、〇六二	二、五二七

前表ニ依レバ一要素ヲ欠ケルモノニ於テ皆共ニ其收量少キヲ見レバ本場ノ稻田ニアリテハ三要素ノ併用ヲ必要トスルヲ知ルニ足ルベク就中窒素ニ於テ然リトス

(一四) 收穫期試験 (自明治三十三年至明治三十五年二個年平均)

本試験ノ目的ハ 稻收穫期ノ早晚ハ其收穫及品質ニ如何ナル關係アルヤヲ試ミントスルニアリ

區別	反當米收量			平均收量
	明治三十三年	明治三十四年	明治三十五年	
一 早刈 (全穗黃變セルモ尙ホ淡綠色ノ穀)	一、八〇四	二、一六三	一、四三二	一、七六三
二 中刈 (穂ノ全部悉ク黃變シタルトキ)	一、七九四	二、二二三	一、四九〇	一、八三三
三 晚刈 (稈ノ黃變シタルトキ)	一、七六七	二、三二八	一、四七七	一、八三二







區別	反當米收量			平均收量
	明治三十四年	同三十五年	同三十六年	
一 收穫期マテ排水セザルモノ	二、二〇九	一、三三八	二、二八四	一、九四〇
二 穗揃期ニ排水セルモノ	二、三三三	一、六八三	二、二五五	二、一四五
三 子實固結セル時排水セルモノ	二、三三八	一、五三三	二、三三九	二、〇三四

前表ニ依レバ稲ノ排水期ハ土質ニヨリ多少差アランモ本場ノ如キ場所ニアリテハ穂揃期ニ行フニ利アリ

(一九) 厩肥比較試験 (自明治三十三年至明治三十五年 三個年平均)

本試験ハ水稻ニ對シ本場製造ノ堆肥(舍内)ト附近農家ノ堆肥(舍外)トノ効驗ヲ比較セントスルニアリ

區別	反當米收量			平均收量
	明治三十三年	同三十四年	同三十五年	
一 舍内 堆肥	二、一四九	二、六二七	一、七五六	二、一七八
二 舍外 堆肥	二、〇七八	二、三五四	一、五九二	二、〇〇八

前表ニ依レバ本場ノ如ク舍内ニ堆積セルモノノ肥効著シク優良ナルヲ示セリ

(二〇) 苗ノ特別育成法試験 (自明治四十四年至大正二年 三個年平均)

本試験ハ特殊ノ方法ニヨリ健全ナル苗ヲ育成セントスルニアリ (其方法ノ詳細ハ大正二年度業務報告ヲ参照スベシ)

區別	反當米收量			平均收量
	明治四十四年	大正元年	同二年	
一 普通 苗	〇、九六七	二、二六三	一、七五五	一、六六二
二 育苗 壺本植	二、三六〇	一、九七八	一、八二二	二、〇五三
三 育苗 二本植	二、五〇八	二、三〇〇	二、一六七	二、三二五
四 育苗 三本植	二、三七〇	二、四三〇	二、二五八	二、三三三
五 育成苗一本植 (七十三株)	二、八五三	二、三三三	二、二〇七	二、四六四

前表ニ依レバ強剛ニ育成セル苗ヲ稍密植、一本植トセル場合最モ收量多カリシモ枯傷等栽培上ノ危険ヲ伴フコト少カラズ寧ロ二本植三本植ハ安全ニシテ有利ナルガ如シ

(二一) 原種ノ育成

本場ニ於テ十數年來品種比較試験ノ結果優良ト認メタル左記品種ニ對シ既ニ第一次ノ純系淘汰ヲ終リ原種トシテ育成中ノ優良系統左ノ如シ

優良品種  
 早稻 關山 七號  
 福島 五郎兵衛 九號







試驗事項	試驗區別	着手年度
(一) 豐凶考照試驗	耕種上一切ノ條件ヲ同下シ早稲關山外二種中稻龜ノ尾外二種晚稻大場外二種ニ付年々ノ作況ヲ比較ス	明治三十年ヨリ繼續
(二) 品種試驗	早中晩稻中ノ有望ナルモノノ尾外二十九種ニ付繼續試驗中ニ屬ス	同二十七年ヨリ繼續
(三) 備用品種試驗	縣ノ内外ヨリ必要ト認ムル品種ヲ蒐集シ本場既定ノ優良品種ト對照シ品種試驗加入ノ資ニ充ツ	大正四年ヨリ繼續
(四) 長方形插秧疎密試驗	株間距離一坪株數及一株苗數ヲ異ニシ五區ニ付比較ス	大正二年ヨリ繼續
(五) 插秧期對除草期試驗	播種期ヲ四月二十日ト三十日トシ之ニ插秧期ト除草期ヲ異ニシ六區ニ付比較ス	大正三年ヨリ繼續
(六) 深耕對肥料用量試驗	耕勸ノ深サヲ三寸、五寸、七寸ニ分チ各之ニ肥料ヲ五割増、普通肥料ノ六區ニ付比較ス	大正五年ヨリ繼續
(七) 苗育成法試驗	播種量ヲ一合、三合、五合ノ三種トシ之ニ苗代肥料ヲ普通、五割増、二倍量ノ九區ニ分チ比較ス	同 上
(八) 大豆粕施用試驗	普通肥料中ノ堆肥ノ全量及其一半ヲ補フニ大豆粕ヲ以テシ且ツ施用期及方法ヲ異ニシ六區ニ分ツ	大正四年ヨリ繼續
(九) 燐酸用量試驗	室素及加里ハ反當ノ成分量ヲ二貫匁ツツトシ燐酸ヲ五百匁乃至二貫匁マテ五區ニ付比較ス	大正三年ヨリ繼續
(十) 要素試驗	新試驗田ニ付窒素、燐酸、加里各單用及其一要素ヲ缺クモノ乃至完全區マテ八區ニ付比較ス	大正二年ヨリ繼續
(十一) 種痘病毛病預防試驗	ホルドー液漬、石灰乳、硫酸銅浸漬等四區ニ付比較ス	大正六年ヨリ新設
(十二) 有效分藥期調查	稻ノ分藥期對出穗狀況ヲ調査スル爲メ六月二十五日ヨリ五日毎ニ七月廿五日マテ七期ニ分ツ	大正三年ヨリ繼續
(十三) 氣象對稱作關係調查		大正六年ヨリ新設
(十四) 高純系分離栽培		明治四十年ヨリ繼續

(五) 優良系比較栽培  
(六) 原種栽培

(ロ) 麥類  
既往試驗事項

大正三年ヨリ繼續  
大正五年ヨリ繼續

試驗事項	試驗區別	試驗年數
(一) 大小麥品種試驗	縣ノ内外ノ間ハズ有望ト認ムルモノニ付比較ス	明治二十五年ヨリ繼續
(二) 大小麥春蒔試驗	大小麥ニ付秋蒔ノ寒及ハ鼠害ニ罹リタル部分ニ補給ノ意味ニテ試驗セリ	同二十八年ヨリ繼續
(三) 大小麥移植試驗	秋季苗床ニ苗トシテ育成シ置キ春季寒害鼠害ノ個所ニ補植ノ意味ニテ試驗セリ	同 上
(四) 播種期試驗	九月十四日、二十日、三十日、十月一日、五日ノ五區ニ分チ試驗ス	同二十九年ヨリ繼續
(五) 凶考照試驗	年々同一ノ土地ニ同一耕種法ヲ以テ同一品種ヲ栽培シ豊凶豫察ノ資料ニ供ス	同三十二年ヨリ繼續
(六) 播種量試驗	反當三升、四升、五升、六升、七升、五區ニ付試驗ス	同三十四年ヨリ繼續
(七) 收穫期試驗	早刈、中刈、晚刈ノ三區ニ付試驗セリ	同三十四年ヨリ繼續
(八) 畦幅試驗	一尺八寸、二尺、二尺二寸、二尺五寸ノ四區ニ分チ試驗ス	同三十四年ヨリ繼續
(九) 施肥期試驗	人糞尿ヲ元肥、追肥及春秋何レノ時期ニ追肥スルヲ可トスルカヲ試驗ス	明治卅四年ヨリ繼續 明治卅一年ヨリ繼續 明治卅三年ヨリ繼續



試驗事項	試驗區別	着手年度
(一)窒素質肥料試驗	厩肥人糞尿、人尿、油粕、餅粕ノ五區ニ付比較セリ	明治四十年 ヨリ五十年
(二)磷酸質肥料試驗	重過磷酸、過磷酸、骨粉、米糠、トーマス燐肥ニ付比較ス	同 上
(三)要素試驗	無肥料、無窒素、無磷酸、無加里、完全肥料ノ五區ニ付行フ	明治四十年 ヨリ二十年
(三二)毛作試驗	水稻收穫跡ニ普通點播、秋季移植、春季移植ノ三區ニ付試驗ス	同 上
(三三)水田ニ毛作ニ於ケル播種法對播種量試驗	播幅ナ二寸、三寸、五寸、八寸ノ點播ニ區別シ反當四升、六升、八升、一斗ニ分チ試驗ス	明治四十二年 ヨリ二十年
(三三)藥灰加用試驗	基本肥料ニ藥灰五貫、十貫、十五貫、二十貫ニ分チテ行フ	同 上
(三三)過磷酸石灰肥効試驗	基本肥料ニ過磷酸石灰三貫、六貫、十貫ノ四區ニ付試驗ス	同 上
(三三)間作大豆播種期試驗	大豆ノ間作トシテ九月十五日ヨリ十月二十五日ニ至ル四十日間 ナ五日毎ニ播種シ九區ニ付行フ	同 上
(三三)春播大麥播種量試驗	反當五升、六升、七升、八升ノ四區ニ付試驗ス	同 上
(三三)石灰加用試驗	無加里、二十貫乃至百貫マテ二十貫ニ分チ更ニ基本肥料ノ三分ノ二及過磷酸チ除キタルモノニ前ト同量ヲ加用シタル モノ等十八區ニ付試驗ス	同 上
(三三)畑二毛作試驗	農商務省ノ委託ニ依リ之ヲ行フ	同 上
(三三)大小麥滿佈用質量試驗	無加用五百匁、一貫、一貫五百匁貳貫目等ノ五區ニ付行フ	大正二年ヨリ 二十年
(三三)小麥畦幅試驗	二尺五寸、三尺、四尺ノ三區ニ付試驗ス	明治廿八年 ヨリ三十八年
(三三)小麥播種期試驗	九月四日、十七日、十月一日、二十日、十一月一日、十四日四月十日 四日播ニ付試驗ス	同 上

品名	出穂期	成熟期	草丈	一莖尺數	品質	累年平均收量
三石月	五月六日	六月三日	二・八三	五・七	不 良	一・八五(七)
五畝四石	五月三	六月三	三・二六	五・七	良	二・〇五(七)
在來種	五月四	六月四	三・四	六	良	二・一七(七)
濠州	五月三	六月三	三・三	五	良	二・二五(七)
カソカ	五月三	六月三	三・三	四	良	二・二五(七)

既往ノ主ナル試驗成績

(一)品種試驗(明治二十八年ヨリ繼續)

適種撰定ノ目的ヲ以テ本場創立以來本試驗ヲ施行セシガ之レニ供用セル品種數大小  
裸麥ヲ通ジレバ六十種ニ及ビタリ左ニ掲グルモノハ其内有望ト認ムルモノニシテ試  
驗年數ノ比較的長キ五ヶ年以上ノ成績ナリトス

大麥之部

品名	出穂期	成熟期	草丈	一莖尺數	品質	累年平均收量
三石月	五月六日	六月三日	二・八三	五・七	不 良	一・八五(七)
五畝四石	五月三	六月三	三・二六	五・七	良	二・〇五(七)
在來種	五月四	六月四	三・四	六	良	二・一七(七)
濠州	五月三	六月三	三・三	五	良	二・二五(七)
カソカ	五月三	六月三	三・三	四	良	二・二五(七)



品種名	出穂期	成熟期	草丈	ノ一尺莖數	品質	累年平均收量
細關穗 東六角 麥	五月二四日 五月二四日 五月二四日	六月六日 六月六日 六月六日	三・三三 三・三四 三・三三	四 四 四	稍良 稍良 良	二・二二(七) 一・九八(七) 一・五九(五)

裸麥之部

長州種	在來種	借來切
五月二八日 六月二日	五月二九日 六月二日	五月二三日 六月二日
六月二日 六月二日	六月二日 六月二日	六月二日 六月二日
二・八五 二・九三	二・八五 二・九三	二・九五 二・九五
五 五	五 五	二 二
稍良 稍良	稍良 稍良	良 良
一・六二(七) 一・三二(七)	一・六二(七) 一・三二(七)	〇・八三(六)

小麥之部

フルツ	カリフォルニヤ	アリシマウンテン	白毛皮	在來種	オレゴン	大久保
六月一日	六月一日	六月一日	六月一日	六月一日	六月一日	六月一日
七月四日	七月三日	七月三日	七月三	七月二	七月二	七月三
四・二	四・四	四・三	四・五	四・三	三・八	四・四
六	六	七	六	七	四	六
良	良	稍良	稍良	良	良	良
一・二四(七)	一・三九(七)	一・二四(七)	一・一八(六)	一・四一(六)	一・二八(五)	一・二〇(七)

(二) 大麥施肥期試驗 (自明治四十年至明治四十一年) (二個年平均)  
 本試驗ハ大麥ニ對シ人糞尿ヲ元肥或ハ追肥ノ何レヲ適當トスルヤヲ驗セシニ左ノ成績ヲ得タリ

試驗別	明治四十年	明治四十一年	以上二個年平均
一、人糞尿全量元肥	二・二七五	二・〇一三	二・一四四
二、人糞尿半量元肥	二・三九五	二・〇二一	二・二〇八
三、人糞尿全量初冬追肥	一・九三五	一・九七八	一・九五七

前表ニ依レバ第二區即チ人糞尿半量ヲ元肥ニ半量ヲ初冬追肥トシテ施肥セルモノニ利アルガ如シ

(三) 太麥過磷酸石灰肥効試驗 (自明治四十三年至明治四十四年) (二個年平均)

本試驗ノ目的ハ大麥ノ肥料トシテ過磷酸石灰ノ適量ヲ知ラントスルニアリ但シ貫數ハ反當ヲ示ス

試驗別	明治四十三年	明治四十四年	二個年平均反當收量
無加用	二・三八〇	二・八六五	二・六二三
三貫加用	二・六二一	三・〇四一	二・八三一
六貫加用	二・七〇〇	三・〇七九	二・八九〇
十貫加用	二・五〇〇	三・五八九	三・〇四五



本試験ハ大麥ニ對シ普通肥料ニ石灰ヲ加用スルノ効驗如何並ニ其適量ヲ知ラントスルニアリ

(四大麥石灰加用試驗(自明治四十四年四個年平均))

試 驗 別	反 當 收 量				四ヶ年平均 反當收量
	明治四十四年	大正元年	大正二年	大正三年	
一 普通肥料	二、二二三	一、〇七九	一、五二三	〇、九八六	一、四二八
二 石灰二十貫加用	二、三〇〇	一、〇七一	一、八九八	一、五九九	一、七二五
三 石灰四十貫加用	二、七五六	一、三六六	二、一九〇	一、五五〇	一、九七一
四 石灰六十貫加用	二、四四三	一、三〇〇	二、一七五	一、五五〇	一、八七一
五 石灰八十貫加用	二、四一六	一、四〇四	二、四〇〇	二、〇六四	二、〇七二
六 普通肥料ヨリ過燐酸ヲ除キ石灰無加用	二、一五〇	一、四四四	二、一八三	二、〇三五	一、九五三
七 石灰二十貫加用	一、九六八	一、一五五	二、〇六三	一、四四七	一、八八三
八 石灰四十貫加用	二、二八五	一、二三四	二、一七五	一、四四七	一、八二九
九 石灰六十貫加用	二、八〇三	一、二二七	二、四三三	一、〇〇〇	一、八〇三
一〇 石灰八十貫加用	二、五九七	一、九六五	二、五二二	一、〇一七	二、〇三三
一一 同上ニ石灰八十貫加用	二、八六九	一、六二三	二、六三三	一、二二六	二、〇八五
一二 同上ニ石灰百貫加用	二、八四九	一、六五六	二、二四五	一、四七〇	二、〇五五
一三 普通肥料ノ三分加用	二、三三七	一、二四二	二、二二三	一、〇四二	一、六九一
一四 同上ニ石灰二十貫加用	二、五八八	一、二四二	二、四三〇	一、七六四	一、九八八

水稻ト同ジク優良ト認ムル品種ニ付大正二年度ヨリ純系淘汰栽培ヲ行ヒ原種トシテ育成中ノモノ左ノ如シ

五原種育成

大麥 濠州、五畝四石、三月

小麥 フルツ、カリフォルニア

一五	同上ニ石灰四十貫加用	二、三九七	一、二八一	二、四八三	一、六五〇	一、九五三
一六	同上ニ石灰六十貫加用	二、七〇〇	一、二〇八	二、二八八	一、九八七	二、〇四六
一七	同上ニ石灰八十貫加用	二、三三八	一、三六八	二、二二〇	一、六三六	一、八八六
一八	同上ニ石灰百貫加用	二、二九六	一、三三三	二、五八〇	一、八三三	一、九八五

試 驗 事 項	試 驗 區 別	着 手 年 度
(一) 豊凶考照試驗	同一ノ耕種法ヲ以テ大麥五畝四石外二種小麥(フルツ)外二種ニ付年々ノ作況ヲ比較ス	明治二十九
(二) 品 種 試 驗	係備品種試驗ノ結果有望ト認ムルモノ大麥三月外九種ニ付繼續試驗中ニ屬ス	同二十五年
(三) 窒素質肥料試驗	人糞尿、硫酸アンモニア、智利硝石等ニ付元、追肥ニ關シ分量並ニ施肥期ニ付十區二分ツ	大正二年ヨリ繼續
(四) 土 入 法 試 驗	普通行ハレル方法ト土入一回、二回、三回ト二分チ比較ス	同 上
(五) 寒害豫備試驗	耕翻、防寒藥劑灌注等七區二分チ比較ス	大正三年ヨリ繼續
(六) 燕麥品種試驗	適良ナル品種ヲ得ンガ爲メ縣ノ内外ヨリ蒐集シタル「レースホース」外八種ニ付比較ス	明治四十四年ヨリ繼續



試験事項	試験	區別	着手年度
(七) 春蒔小麥品種試験	適種ヲ得ンガ爲メ「サスカチヤン」外四種ニ付比較ス		明治四十四年ヨリ繼續
(八) 同大麥品種試験	右同様「ハンナ」外五種ニ付比較ス		同上
(九) 原種 育成			大正二年ヨリ繼續
(十) 原種 栽培			大正五年ヨリ繼續

既往試験事項

(ハ) 大小豆

試験事項	試験	區別	試験年數
(一) 大小豆 試作	縣ノ内外各品種ニ付比較ス		明治二十四年
(二) 大小豆 肥料試験	腐植質土ニ糠、糞灰、加用ト同上ニ人糞糞灰加用補土ニ堆肥糞灰加用同上ニ人糞糞灰加用ニ付比較ス		同二十五年ヨリ四十年
(三) 大豆 播種法試験	粒ノ大中小ノ三區ニ付比較ス		同二十五年ヨリ二十六年
(四) 小豆 品種試験	室蘭外拾數種ニ付比較ス		同二十六年
(五) 大豆 播種量試験			同二十六年
(六) 大小豆 種子被土試験	五分、一寸二寸ノ三區ニ比較ス		同二十六年

(七) 大豆 播種期試験	立夏、小滿、芒種、夏至ノ四區ニ付比較ス		明治二十九年ヨリ六十年
(八) 小豆 播種期試験	同上		同二十九年ヨリ三十年
(九) 大豆 一株本數試験	一粒二粒ノ三區ニ付比較ス		同三十年ヨリ三十二年
(十) 小豆 一株本數試験	同上		同上
(十一) 大豆 收穫期試験	葉ノ半分落タルトキ全部落タルトキ莢ノ破開セルモノアルトキノ三區ニ付比較ス		明治三十一年ヨリ三十二年
(十二) 小豆 收穫期試験	一、ハ成熟セル莢ニ漸次收穫ス 二、ハ三青四黄ノトキ收穫ス		同上
(十三) 大豆 選種試験	大粒、中粒、小粒ノ三區ニ付比較ス		明治三十三年ヨリ三十九年
(十四) 間作大豆 播種期試験	大麥ノ間作トシテ大豆ヲ五月十日ヨリ六月十五日迄テ五日毎ニ八區ニ付試験ス		同三十九年ヨリ三十九年

既往ノ主ナル試験成績

(一) 大豆品種試験 (明治二十四年ヨリ繼續中)

本場創始以來ノ試験ニ供用セル品種數ハ實ニ七拾以上ニ達スルモ年ヲ閱ミスルニ從ヒ優良ナル新品種ノ増加ニ伴ヒ思ハシカラザル品種ハ之レヲ廢棄セシ爲メ現在三十品種ニ付試験中ナルガ其ノ成績ノ概要左ノ如シ

品種名	成熟期	丈	品質	平均反當收量
一 青	八月二四日	一・〇六尺	中	〇・四七四石



品名	成熟期	草丈	品質	平均反當收量
二 白ち	九月八日	二・一〇	中	〇・九三六
三 白ち	九月二〇	一・八九	中	一・四七八
四 裸ち	九月二二	一・七九	中	一・三〇二
五 揚地	九月二二	一・七五	中	一・四四七
六 菊地	九月二五	一・五九	中	一・三三四
七 半莊	九月二六	一・九七	中	一・四七三
八 大目	九月二六	一・七一	中	一・一五三
九 第二赤	九月二六	二・〇九	中	一・〇三一
一〇 鶴友	九月二九	二・一三	中	一・五一二
一一 長裸	九月三〇	二・〇五	中	一・三九七
一二 鬼月	九月三〇	二・二七	不	一・二三七
一三 鼠肥	九月三〇	二・一四	不	一・四七五
一四 白肥	九月三〇	二・二七	不	一・一四六
一五 紫肥	九月三〇	二・〇六	不	一・三五三
一六 千割	九月三〇	二・三二	不	一・二六九
一七 秋田	九月三〇	二・六七	不	一・五六六
一八 秋田	九月三〇	二・五五	不	一・五二九

品名	成熟期	草丈	品質	平均反當收量
二〇 野起	一〇・二三	二・五〇	中	一・二六七
二一 兄弟	一〇・一六	二・三二	中	一・四六七
二二 赤莢	一〇・二七	二・四六	良	一・四六三
二三 赤莢	一〇・二七	二・四四	良	一・四三三
二四 赤莢	一〇・二七	二・一四	良	〇・九八七
二五 玉造	一〇・二八	二・二二	良	一・二一八
二六 黒莢	一〇・二六	一・四八	中	一・二七九
二七 朝日	一〇・二八	二・〇三	中	一・二一四
二八 白目	一〇・二八	一・八五	中	一・二三〇
二九 白目	一〇・二九	一・八八	中	一・二六八
三〇 黄白	一〇・二八	二・一三	中	一・五九二
三一 水生	九・二三	一・三一	不	〇・七二一
三二 水潜	九・二三	一・三五	不	〇・五二五
三三 刈羽	九・二二	一・四七	不	〇・九二一

(三) 間作大豆播種期試験 (自明治三十九年 至明治四十一年 三箇年平均)

本試験ハ大麥ノ間作トシテ大豆ヲ栽培スルニ當リ適當ナル播種期ヲ知ランガ爲メ明治三十九年ヨリ三箇年繼續試験セシガ其成績左ノ如シ



播種期	反			當			收			量			三 個 年 平 均	
	明治三十九年	同四十年	同四十一年	明治三十九年	同四十年	同四十一年	明治三十九年	同四十年	同四十一年	明治三十九年	同四十年	同四十一年		反當收量
五月十日播														
五月十五日播	一、七九〇	一、七五五	一、七七六	一、八二二	一、九二七	一、七四三	一、七九〇	一、八一四	一、八二一	一、七九四	一、七九四	一、八三九	一、七五九	一、七九〇
五月二十日播	一、八一五	一、八二二	一、九二七	一、九〇〇	一、六九一	一、八二一	一、八二一	一、八二一	一、八二一	一、七九四	一、七九四	一、八三九	一、七五九	一、七九〇
五月二十五日播	一、八二二	二、〇三八	一、九〇〇	一、九〇〇	一、六九一	一、七九四	一、七九四	一、七九四	一、七九四	一、七九四	一、七九四	一、八三九	一、七五九	一、七九〇
六月五日播	一、九五二	一、九五二	一、六六五	一、六六五	一、六六五	一、六六五	一、六六五	一、六六五	一、六六五	一、六六五	一、六六五	一、七六七	一、七五九	一、七九〇
六月十日播	一、七一二	一、七一二	一、六一八	一、六一八	一、六一八	一、六一八	一、六一八	一、六一八	一、六一八	一、六一八	一、六一八	一、七六七	一、七五九	一、七九〇
六月十五日播	一、六九〇	一、六九〇	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、二二二	一、六三四	一、七五九	一、七九〇
														一、四〇三

右ノ成績ニ依レバ五月二十日播ハ收量最モ多クシテ該期日ヲ前後スルニ從ヒ漸次減收ヲ免レザルナリ

四大豆撰種試驗(自明治三十三年至明治三十七年五個年平均)

本試驗ハ種子トシテ豐滿ナル大粒ト中、小粒トノ得失即チ撰種ノ精粗ト收量トノ關係ヲ具體的ニ知ラントスルニアリ今其成績ヲ擧グレバ左ノ如シ

試驗別	反					當					收					五 ヶ 年 平 均
	明治三十三年	同三十四年	同三十五年	同三十六年	同三十七年	明治三十三年	同三十四年	同三十五年	同三十六年	同三十七年	明治三十三年	同三十四年	同三十五年	同三十六年	同三十七年	
大粒	一、八四七	二、〇五六	一、四四九	一、一三三	一、五七一	一、八四七	二、〇五六	一、四四九	一、一三三	一、五七一	一、八四七	二、〇五六	一、四四九	一、一三三	一、五七一	一、六〇九

中粒	小粒
一、八二〇	一、五三七
一、九七五	一、四二九
一、一〇三	一、五三〇
一、〇九三	一、五三〇
一、五六〇	一、五三七
一、五三〇	一、四二九

成績ノ結果ニヨリ豐滿ニシテ充實セル大粒ヲ種子トスルノ必要ヲ知ルニ足ラン  
 五原種育成  
 大正二年度ヨリ左ノ品種ヲ原種トシテ育成中ナリ

- 早熟種 白莢、長月
- 中熟種 秋田、兄
- 晚熟種 赤莢

現在試驗事項

試驗事項	試驗區	別	着手年度
(一)大豆種品試驗	早、中、晚種中有望ナルモノニ九種ニ付試驗中ニ屬ス		大正二年ヨリ繼續
(二)大豆木灰加用試驗	無加用、十、十五、二十貫ノ用量ニ付比較ス		大正五年ヨリ繼續
(三)小麥小豆二毛作ト畦幅對播種量試驗	畦幅二尺以上三種ニ分チ小麥播種量四升乃至六升トシ又小豆ノ株間ヲ四寸乃至七寸トシ比較ス		大正六年新設



試驗事項	試驗區別	着手年度
(四) 原種育成		大正二年
(五) 原種栽培		大正五年

一、藝園部

本縣ノ園藝業ハ概シテ幼稚ニシテ秩序アル發達ノ曙光ヲ認ムルニ至リシハ僅カニ數年來ノ事ニ屬セリ從テ本場ノ創立後永ク斯業ニ關スル試驗ニ着手スルノ運ニ達セザリキ然リト雖モ時代趨勢ハ年ト共ニ之カ試驗研究ヲ必要タラシムルニ至リ遂ニ明治四十二年度ノ交ヨリ果樹及蔬菜ニ關スル試驗ニ着手シ隨時其ノ成績ヲ發表シ來レリ而シテ既往ニ於ケル試驗事項並ニ其成績ノ主ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

既往ノ試驗事項

試驗事項	區別	着手年度
(一) 馬鈴薯三要素試驗	無肥料、無窒素、無磷酸、無加里及三要素ノ五區ニ付行フ	明治卅三年
(二) 薯試驗	小、中、大、最大縱二ツ切、斜ニ二ツ切ノ六區ニ付比較セリ	同三十二年
(三) 甘藍假植回数試驗	無、一、二、三回假植ニ付比較セリ	同四十一年

(四) 馬鈴薯畦幅株間試驗	畦巾ヲ二尺二寸ト二尺五寸ト二尺八寸トニ大別シ並ニ株間九寸、一尺二寸、一尺五寸ノ六區ニ分ツ	明治卅三年
(五) 馬鈴薯除藥法試驗	不除藥、除藥ニ本立、同一本立及前三區ヲ七寸ノ時捕心セルモノノ六區ニ分ツ	同四十二年
(六) 茄子連作試驗	普通區、石灰區、石灰窒素區、木灰區ノ四區ノ使用法ニ付比較セリ	大正三年
(七) 蘿蔔畦幅株間試驗	畦株ヲ二尺、二尺五寸ニ大別シ之ニ株間一尺、一尺二寸、一尺五寸等八區ニ分ツ	明治卅三年
(八) 馬鈴薯種薯貯藏法試驗	俵ニ入レ穀殼中ニ納メ室内ニ貯藏セルモノト露地ニ堆積シ土ヲ覆ヒ置キタルモノト比較セリ	同四十四年

既往ノ主ナル試驗成績

一、馬鈴薯品種試驗

本試驗ノ目的ハ適種ヲ撰定セントスルニアリテ明治二十七年創設シ北海道及ヒ米國ヨリ種薯ヲ取寄セ試驗ニ供用セシ品種數六十二ニシテ現ニ有望種トシテ試驗セル品種名及ヒ一反步收量左ノ如シ

品種名	收穫期	平均收量
アーリーローズ	八月一日	四六二、二〇九
アーリービューチフル	八月二日	四五七、三七九
薄赤	七月三十一日	四九二、四一七
アーリーノーザン	八月七日	四六二、一三五
ボラー	七月三十一日	四七三、八九九



品名	收穫期	明治四十四年迄平均收量
アイリールハーベスト	八月十一日	四二四、三九八
ミシガレン	八月十一日	四八七、二二二
サールタル	八月十一日	四五四、二〇六
カーネル	八月十一日	四九二、六七八
アンケル	八月十一日	四八四、三二六

(二)馬鈴薯三要素試験

本試験ノ目的ハ肥料三要素ノ馬鈴薯作ニ如何ナル効驗ヲ呈スルカラ檢セントスルニアリテ其成績左ノ如シ

區別	明治三十三年三十四年平均反當收量
無肥料	二三六、八〇〇
無窒素(磷酸加里)	一九七、〇〇〇
無磷酸(窒素加里)	六六二、〇〇〇
無加里(窒素磷酸)	六七四、二〇〇
無窒素磷酸加里	七六四、二〇〇

備考 三要素ノ量ハ反當各三貫五百匁宛ニシテ窒素ハ硫酸アンモニヤ磷酸ハ重過

磷酸石灰、加里ハ炭酸加里ヲ以テ之ヲ供給セリ

右ノ結果ニヨリ馬鈴薯栽培上最モ肥効ノ大ナルハ窒素ニシテ磷酸、加里漸次之レニ次クヲ見ルヘク其栽培上三要素ノ施用亦緊要ナルヲ窺知シ得ベシ

(三)馬鈴薯畦巾株間試験

本試験ノ目的ハ馬鈴薯ヲ栽培スルニ方リ其ノ畦巾及株間ノ廣狹ハ薯ノ收量大小ニ如何ナル影響ヲ呈スルヤヲ試ミ以テ適當ナル距離ヲ定メントスルニアリ今明治四十二年ヨリ大正元年迄ノ四ケ年ニ於ケル平均反當ヲ示スコト左ノ如シ

區別	總個數	總重數	一個平均重量
畦巾二尺二寸 株間九寸	三九、六一三	四三八、六二二	一一、一
畦巾二尺二寸 株間一尺二寸	三一、六九一	四二六、八八六	一三、四
畦巾二尺二寸 株間一尺五寸	三四、二三八	四六七、八五九	一四、一
畦巾二尺五寸 株間九寸	三六、三四八	四三二、三二一	一二、二
畦巾二尺五寸 株間一尺二寸	三三、五九七	四八六、五六八	一四、四
畦巾二尺五寸 株間一尺五寸	二四、七一	三九四、六九七	一六、四

右ノ結果ニ據レハ馬鈴薯ノ畦幅及株間距離ノ増加スルニ從ヒ一個平均重量ノ増加スルヲ知ルベク栽培上畦幅二尺五寸株間一尺二寸、又ハ畦幅二尺二寸、株間一尺五寸ヲ



以テ適當タルヲ認ム

四馬鈴薯除糞法試驗

本試驗ノ目的ハ馬鈴薯栽培上除糞ノ効驗如何ヲ試ミ其ノ適法ヲ知ラントスルニアリ  
今明治四十三年四十四年ノ二ケ年ニ於ケル反當收量左ノ如シ

區別	個數	大 重			中			小			計
		大	中	小	大	中	小	大	中	小	
除糞	二	三九、四八七	二〇六、九三八	一四二、四三〇	二七、六〇三	四六八、九七一	二六、九四	二二六、九九七	一四五、八三六	八九、五五四	四五三、三八七
除糞	一	二二、〇〇五	一九二、二七	一〇〇、六九五	八九、九〇	六五、三四四	一九二、〇六三	一〇二、八八二	四四、九四	四四七、四二	四四七、四二
除糞	七	三三、〇三三	二四〇、一一	一一六、九三七	一一六、九三七	一〇二、八八二	二七、五九三	二二、〇〇九	二七、五九三	二二、〇〇九	四〇〇、九三〇
除糞	一本立莖長七寸ノ時摘心	二七、五九三	二四〇、一一	一一六、九三七	一一六、九三七	一〇二、八八二	二七、五九三	二二、〇〇九	二七、五九三	二二、〇〇九	四〇〇、九三〇
除糞	二本立莖長七寸ノ時摘心	二七、五九三	二四〇、一一	一一六、九三七	一一六、九三七	一〇二、八八二	二七、五九三	二二、〇〇九	二七、五九三	二二、〇〇九	四〇〇、九三〇
除糞	一本立莖長七寸ノトキ摘心	二七、五九三	二四〇、一一	一一六、九三七	一一六、九三七	一〇二、八八二	二七、五九三	二二、〇〇九	二七、五九三	二二、〇〇九	四〇〇、九三〇

右ノ結果ニ據リ馬鈴薯ノ除糞ハ其ノ度ヲ増スニ從ヒ總收量ハ減スルモ却テ價值高キ  
大薯ノ量ヲ増加スヘキヲ以テ寧ロ除糞シテ一、二本立トナスヲ適當ト認メ得ヘシ而  
シテ摘心ハ普通ノ場合ニアリテハ之ヲ行フノ要ナシ

五馬鈴薯種薯貯藏法試驗

本試驗ノ目的ハ馬鈴薯種薯ノ適當ナル貯藏法ヲ知ラントアスルニアリ今大正元年ヨ

リ大正四年迄ノ四ケ年平均成績ヲ示セハ左ノ如シ

區別	貯藏始期ニ於ケル薯ノ量	貯藏終期ニ於ケル薯ノ量	貯藏中ニ於ケル腐敗數	貯藏中ニ於ケル凍傷數
室内貯藏	四、〇〇〇	三、七九三	〇、二五	〇、六
露地貯藏	四、〇〇〇	四、〇七七	四、二五	〇、六

右貯藏薯ヲ栽植試驗セシニ其反當收量左ノ如シ

區別	個數	重 量
室内貯藏	二四、一四一	四一六、四八八
露地貯藏	二二、一五六	三八六、三九三

備考 室内貯藏ノモノハ籾殻ニ混シ俵ニ入レ室内ニ置キタルモノ  
露地貯藏ノモノハ露地ニ堆積シ土ヲ覆ヒ置キタルモノ  
以上ノ成績ヲ綜合シテ之レヲ見ルニ露地貯藏ノモノハ凍傷數少ナキモ腐敗數多ク之  
レヲ栽培ノ結果ニ徴スルニ收量又室内貯藏ノモノニ劣レリ故ニ種薯ヲ貯藏セントセ  
ハ凍傷ノ慮ナキ室内ニ貯藏スルヲ以テ良法ト認メ得ヘシ

六茄子品種試驗

本試驗ノ目的ハ其ノ優良種ノ發見ニアリテ明治四十一年ヨリ施行シ供試品種十種中



有望ト認ムヘキ左ノ品種ニ付キ大正二年ヨリ大正四年ノ迄平均及反當收量ヲ示セバ左ノ如シ

品 種 名	収 穫 始	個	重 量	重 量
河邊長茄子	七月二十一日	七二、九一〇	一、一三八、七六五	
南部長茄子	七月十八日	七六、一九七	一、一四二、四八七	
蔓細千成茄子	七月十二日	七四、三八一	九九四、九二九	
寺内長茄子	七月十六日	八〇、七二〇	一、二四六、八三五	
真坂長茄子	七月十七日	八五、三五八	一、三八四、五二五	

(七) 七茄子連作試験

本試験ノ目的ハ茄子栽培上連作不適ノ原因ヲ調査シ之ガ排除ノ方法ヲ知ラントルニアリテ大正二年茄子品種試験ニ供セシ畑地ヲ撰ビ大正三、四ノ二ヶ年連作ヲナセリ其平均成績ヲ示セハ左ノ如シ

試 験 別	品 種 名	個	重 量	青枯病被害歩合
標準區(無豫防)	河邊長茄子	六、七〇〇	八〇八、三六〇	五・五%
	中生山茄子	一四、六〇〇	二〇九、六〇〇	九五・九%
	蔓細千成茄子	一一、三〇〇	一四五、六六〇	一〇〇・

品 種 名	個	重 量	青枯病被害歩合
河邊長茄子	二九、三二七	三、七九、九七四	六七・一
中生山茄子	八六、九〇〇	一、一〇〇、二〇〇	五・五
蔓細千成茄子	九、五〇〇	一、二八〇	一〇〇・
平均	一〇、一五〇	一、三〇〇、八〇〇	一〇〇・
石灰窒素區	八、九〇七	一、二九、四四〇	六八・五
平均	二七、七〇〇	三、八〇、五六〇	八七・四
水生山茄子	三三、九〇〇	六三三、二八〇	六三・四
蔓細千成茄子	五、二〇〇	七五、〇九四	四九・九
河邊長茄子	七、四〇〇	一、〇九九、九六〇	五・五
中生山茄子	四、六〇〇	五、二八〇	一〇〇・
蔓細千成茄子	七、一〇〇	七五、八四〇	一〇〇・
平均	二九、七〇〇	四〇九、二七〇	六八・五

以上ノ結果ニ據レハ茄子ヲ連作スルトキハ病害(青枯病)ノ發生激甚ヲ極メ著シク收量ヲ減スルモ河邊長茄子ニアリテハ其ノ被害ヲ受クルコト甚鮮少ナリ而シテ之カ豫防劑中石灰窒素ハ幾分効果アルモ未タ充分ナリトハ認メ難ク其他ノ各區ニ於ケル被害歩合ハ無豫防區ニ比シ敢ヘテ徑庭ナキモノノ如シ唯收量ノ無豫防區ヨリ多キハ病害ノ發生ヲ多少抑制遲延セシメシニアルハ疑ハレサル處ナリトス



故ニ茄子ヲ連作セントセバ病害ノ抵抗力強キ品種ヲ撰定スルハ蓋シ其最モ適切ナル要ニシテ尙石灰窒素其他ノ豫防劑等ヲ以テ圃地ヲ消毒スルハ亦必要ナル操作タルヲ認ム

ハ菜豆品種試験

本試験ノ目的ハ菜豆ノ良種發見ニアリテ明治四十一年ヨリ繼續施行セリ供試品種二十八種中其有望ト認ムヘキ品種ニ付成績ヲ示スコト左ノ如シ

品名	收穫期	大正元ヨリ大正四年迄平均反當收量
キドニーフグス (矮性)	七月七日	二七三、〇〇八
ゴールドフグス (矮性)	七月七日	三〇九、九七五
丸金 (矮性)	七月十日	三〇三、六五〇
ホアチフ (矮性)	七月七日	二五三、〇二五
更紗 (矮性)	七月七日	二四五、二二五
アリコホレットシユモンドール (矮性)	七月十七日	四五一、一二五
サウサルンプロリフ井ツク (矮性)	七月二十八日	五四三、〇七五
ホワイトプリンセスアウトシードリンク (矮性)	八月一日	三四三、三七五
オールドホームステット (矮性)	八月十一日	六二八、七〇〇
白八ツ房 (蔓性)	七月二十七日	四五八、九五〇
茶八ツ房 (蔓性)	七月二十三日	五〇〇、九〇〇

九豌豆品種試験

本試験ノ目的ハ莢採用良品種ノ撰定ニアリテ明治四十二年ヨリ繼續施行セリ今其成績ヲ示スコト左ノ如シ

品名	收穫期	明治四十二年ヨリ大正二年迄平均反當收量
サンハートシユマン、ネンアトレラジョコス	六月二十三日	二三八、九四〇
ザンパーシユマン、ボレ	六月二十五日	二三五、四八〇
在來種	六月二十二日	二二五、〇〇〇
ミネソタ大種	六月二十六日	二七三、五八〇
佛國大種	六月二十四日	三〇二、二〇〇
メルテイノグ、シユガ	六月十八日	二八四、八六〇

一〇葱頭品種試験

本試験ノ目的ハ葱頭ノ適種ヲ撰定セントスルニアリテ明治四十四年ヨリ繼續施行セリ今其成績ヲ示スコト左ノ如シ

品名	收穫期	明治四十四年ヨリ大正四年迄平均反當收量
赤葱頭	九月二日	四三三、九二五



品名	種名	收穫期	收穫量
白葱	頭	九月一日	二九六、一六五
黃葱	頭	八月二十九日	四〇四、九一八

明治四十四年ヨリ大正四年迄平均反當收量

(一) 甘藍品種試驗

本試驗ノ目的ハ甘藍ノ適種ヲ撰定スルニアリ明治四十一年ヨリ施行セリ供試品種十  
二種中有望ト認メラルル品種ニ付成績ヲ示スコト左ノ如シ

品名	收穫期	收穫量
札幌 幌 甘 藍	八月二十六日	一、八一三
オランダ キン	八月二十六日	一、五六四
サクセツ シヨ	九月一日	一、九四七
	八月二十四日	一、四二三

大正二年乃至四年平均反當收量

(二) 甘藍假植回數試驗

本試驗ノ目的ハ甘藍苗假植回數ノ多少ハ收量品質ニ如何ナル影響ヲ及ホスヤヲ明カ  
ニシ其適當ナル回數ヲ知ラントスルニアリ今其成績ヲ示スコト左ノ如シ

區別	總重量	球數	一個平均重量
一 一回假植	五五五、三二八	一、六五九	三三五
二 二回假植	五八六、八一三	一、八三七	三一九
三 三回假植	四四九、八五五	一、六二二	二七七

右ノ結果ニ據レハ甘藍苗育成上其假植回數ヲ増スニ從ヒ一個平均重量ハ順次ニ減少  
シ二回假植ハ結球數最モ多シ故ニ當地方ノ如キ氣候ノ下ニアリテハ甘藍ノ假植回數  
ハ一、二回ヲ以テ適當ナリト認ム

(三) 蘿蔔品種試驗

本試驗ノ目的ハ蘿蔔ノ良種ヲ撰定スルニアリテ明治四十一年ヨリ繼續試驗セシニ四  
十一年ヨリ大正三年迄ノ五ケ年ニ於ケル平均反當收量左ノ如シ但シ四十二年ヲ除ク

品名	收穫期	重量
練馬 尻	十一月十二日	一、七八七、一三七
方馬 尻	十一月十二日	一、七二五、九九三
宮重 尻	十一月十二日	一、五六五、一九一
聖長 尻	十一月十二日	一、九一八、〇七五
仁井田	十一月十三日	二、〇九五、一〇五



(一四) 蘿蔔畦幅株間試驗  
 本試驗ノ目的、蘿蔔栽培上適當ナル畦幅株間ヲ知ラントスルニアリ明治四十四年ヨリ大正二年三ヶ年迄ノ平均反當收量ヲ示スコト左ノ如シ

區	別	本	數	重	量
畦幅株間	株間	二	四、五〇八	二、二六四、一九二	
畦幅株間	株間	三	三、七六五	一、九一〇、三五八	
畦幅株間	株間	二	二、九二三	一、五四五、四八四	
畦幅株間	株間	三	三、五五二	一、八〇二、三四三	
畦幅株間	株間	二	二、九九一	一、九三一、七五一	
畦幅株間	株間	二	二、二七〇	一、六五七、七八八	
畦幅株間	株間	三	三、九三三	一、七五三、五七八	
畦幅株間	株間	三	三、一五六	一、六一七、四〇〇	

右ノ結果ニ據リテ見レバ漬物用大根ニアリテハ畦幅二尺株間一尺ヲ以テ適當ト認メ得ヘシ

現在試驗事項

試驗事項	試驗	區別	着手年度
(一) 馬鈴薯品種試驗	優良ト認ムルモノ「アーリーローズ」外十五種ニ付試驗ス		明治二十七年
(二) 同 芽出補試驗	普通種ト芽出補トヲ比較ス		明治四十年
(三) 茄子品種試驗	其一チ長茄子トシ河邊長川子外二種其二チ丸 子トシ蔓細千成 外十二種ニ付比較ス		明治四十一年
(四) 胡瓜品種試驗	三枚目節成外十種ニ付比較ス		同四十二年
(五) 胡瓜株間對摘心試驗	放任、一本立、二本立ノ三大區別ニ對シ更ニ株間チ一尺、一尺五 寸、二尺ノ三區ツツニ分チ比較ス		同四十二年
(六) 南瓜品種試驗	縮縮外五種ニ付比較ス		大正五年
(七) 南瓜摘心試驗	放任及五葉ノトキ摘心シテ四枝ヲ出シ其後ノ取扱法ニヨリ四區 二付比較ス		大正五年
(八) 甜瓜ノ品種試驗	梨甜瓜外九種ニ付行フ		大正五年
(九) 甜瓜ノ摘心試驗	標準及三葉又ハ四葉ニテ摘心シ二枝若クハ三枝ヲ出シ更ニ四葉 二テ或ハ各枝芽三葉ニテ摘心ス		大正五年
(一〇) 西瓜品種試驗	「アイスクリーム」外五種ニ付比較ス		大正五年
(一一) 西瓜摘心試驗	放任及五葉ノトキ摘心シ四枝ヲ出シ更ニ各枝ノ側芽ヲ除去シ又 雌花着生後二葉ニテ摘心ス		大正五年
(一二) 甘藍品種試驗	「マンターゴ」外五種ニ付比較ス		明治十一年
(一三) 甘藍播種試驗	四月十五日ヨリ十日毎ニ五月二十五日マテ五區ニ付比較ス		大正五年







品種名左ノ如シ

上海水蜜桃、土用水蜜桃、アーリークローフォード、天津水蜜桃、アーリー  
 リバース、トライアンフ、アーリーニューイントンアムステン、ジューン、  
 (五) 葡萄品種並ニ整技法試験、反別四畝十五歩  
 品種名左ノ如シ

ハートフォードプロリフィック、ムーアスダイヤモンド、レデーワシントン、  
 プライトン、ベークン、ナイヤガラ、コンコード、ハーバート、スウヰート  
 ウォーター、ブラツクハンバーク

三、農藝化學部

當部所屬ノ事業ハ主トシテ肥料土壤及其他農産ニ關スル物料分析鑑定ニアルモ由來  
 本縣ノ肥料界ハ其大部分堆肥類ヲ以テ供給シツアルノ現狀ナルヲ以テ斯種ノ分析  
 鑑定ヲ要スルモノ少ナク從テ當部ノ事業トシテハ僅ニ酸性土壤ノ調査野鼠チブス菌  
 ノ培養配布、フォルマリンノ分析及一部販賣肥料ノ分析鑑定ニ應セルノ狀態ニ過キ  
 ス然レトモ時世ノ要望ニ伴レ漸次該部ノ擴張ヲ計リ以テ本縣農業界ノ進歩發達ニ資  
 スル所アラシメント欲ス

(イ) 酸性土壤ノ調査

明治四十二年五月農商務省農務局農産課長及本縣内務部長ヨリ管内耕地ニ對スル酸  
 度調査施行方通達ニ基キ翌四十三年度ヨリ管内各町村ニ付キ分析調査ニ着手大正五  
 年ニテ全縣完了セリ今調査町村數採集個處及田畑ノ區別左ノ如シ

年 別	調査町村數	採集個所	田	畑
明治四十四年	一〇一	二四七	三七九	八九
明治四十五年	一五四	六九六	四三四	二六二
大正二年	二二二	九六	七八	一八
大正三年	四三	一八二	一六三	一九
大正四年	九	四四	四四	〇
大正五年	一九	七九	五四	二五

以上調査ノ結果ニ依レバ縣内耕地ハ概シテ酸度ノ強度ヲ示シ其ノ弱キモノト雖トモ  
 尙且ツ反當ノ消石灰中和量平均十貫ヲ降ラズ強キモノニ至ツテハ實ニ百貫以上ノモ  
 ノ亦極メテ稀ナラサルガ如シ之レヲ縣内三方面ニ付キ通觀スルニ中央部沿岸地方ハ  
 比較的弱ク縣南縣北之レニ順位ス蓋シ母岩ノ性状、土壤ノ種類或ハ耕耘肥培ノ程度  
 等ニ職由スキコト多カルヘシ

ロ 野鼠チブス菌培養及配付

本縣ハ由來野鼠ノ作物ヲ蝕害スルヤ頗ル甚シ從テコレカ驅除勵行ヲナサンガ爲メ明



治三十八年十一月盛岡高等農林學校ニ於テ右菌培養ノ講習會開設ニ際シ本場ヨリ技術員ヲ派遣シ之カ講習ヲ受ケシメ翌三十九年度ニ於テ實費ヲ以テ當業者ノ希望ニ應シ之ヲ配付シタリシカ其ノ成績截然トシテ顯著ナルヲ得タリ然ルニ明治四十年三月秋田縣告示第九四號ヲ以テ野鼠チブス菌配付規程ヲ設定セラレ同年度ヨリ之ガ無償配付ヲ繼續シ以テ今日ニ及ヘリ今明治四十年四月ヨリ大正五年十二月マテニ至ル間ノ野鼠驅除實施反別同菌培養ノ配付數量ヲ年別ニ示セハ左ノ如シ

年 別	驅 除 反 別	配付菌管數 (寒天培養)	配 付 菌 壺 數 (ナイヨン培養)
明治四十年	四一九、五八一	二、五〇二	
同 四十一年	三、一五三、九八二	八、六三一	
同 四十二年	三、二七五、三七〇	一五、七三七	二九八
同 四十三年	三、一九八、五三一	一六、〇七三	
同 四十四年	二、五〇〇、〇〇〇	一、二〇〇五	
大 正 元 年	一、四五九、七九二	六、二九九	
大 正 二 年	一、八八三、九一二	七、四九八	
大 正 三 年	三、六九七、六〇二	一五、二四八	
大 正 四 年	三、三九五、九五〇	一一、八六四	
大 正 五 年	五、三三八、五〇〇	二二、四六四	

四、病 蟲 部

病蟲害ノ農作物ニ與フル影響ハ年ニ依リ頗ル慘鼻ヲ呈スルハ言ヲ俟タサル所ニシテ本場ハ夙ニ明治二十九年ヨリ之レカ驅除豫防ノ試驗研究ニ或ハ飼育ヲ行ヒ以テ其經過習性調査ニ意ヲ傾注シ來レルモ如何セン職員中ニ専門ノ擔任者ヲ缺キ常ニ種藝園藝擔任者ヲシテ本務ノ傍ラ之ヲ兼攝セシメタルノ姿ナルヲ以テ充分ナル試驗研究ニ乏シキハ大ニ遺憾トスル所タリ而シテ既往ニ於ケル試驗事項ノ主ナルモノ及其成績ヲ舉グレバ左ノ如シ

試 驗 事 項	試 驗 區 別	試 驗 年 數
(一) 害 蟲 飼 育 試 驗	稻螟蟲、浮塵子、桑ノ枝尺蠖、林檎ノくろこニ付行フ 梅けむし、林檎ノぶらんこけむし	明治三十四年 同三十五年
(二) 上		同四十年
(三) 上	稻二化螟蟲、泥負蟲、蝗、桑ノ枝尺蠖、林檎ノくろこ、菜ノ青蟲 無驅除、心枯摘除、枯稈摘除、心枯枯穂摘除ノ四區ニ分ツ	同上ヨリ三 同四十二年
(四) 二 化 螟 虫 驅 除 試 驗	第一孵化第二孵化期ノ始終ニ付	同四十二年
(五) 同 蛾 發 生 期 調 査	葉ニ於ケル位置卵塊ノ大サ粒數ニ付キ行フ	同四十二年 同四十年ヨ
(六) 同 卵 塊 調 査	稻ノ種類ニ對スル被害ノ輕重及糞、糠ニ對スル關係ヲ調査ス	同上ヨリ七 同三十七
(七) 同 稈 内 生 棲 狀 態 調 査		



試験事項	試験	區別	試験年數
八同加害鳴蟻調査	時期ノ早晚ヲ知ランガ爲メ五月廿八日ヨリ七月五日迄ニ七回ニ分チ行フ		明治四十年
九玄米貯蔵試験	新古藁各一重、改良二重俵、保米袋入俵ノ四區ニ付試験ヲナセリ		ヨリ四十年
一〇多黑穂豫防試験	大小稈多ニ付豫防、無豫防ニ付行フ		同四十年
一一ゆりみ、ア防除試験	苗拔取後乾燥起セルモノト大豆ヲ栽培利用后耕起セルモノトヲ比較ス		同四十二年
一二苗木青酸瓦斯燻蒸試験	介殼蟲及綿蟲ニ對シ藥量ト時間トヲ異ニシテ行フ		同四十二年
一三二化螟蟲加害時期試験	調査期ヲ六月三十日ヨリ九月十八日マテ五日ヲ隔テテ十七回ニ調査セリ		ヨリ四十二年
一四同越冬状況調査	地上ヨリ刈株ノ高サヲ五分トシ一寸七分同二寸五分、五寸トシ各一、四七〇株ニ付行フ		明治四十二年 ヨリ五十二年

本試験ハ稻ノ害蟲タル二化螟虫ヲ驅除スルニ心枯、枯穂摘除法ノ効果如何ヲ知ラントスルニアリ

(一)二化螟蟲驅除豫防試験(自明治四十年三ヶ年平均)  
至四十二年三ヶ年平均)

區別	四十年	四十一年	四十二年	三ヶ年平均	順位
一無驅除	一、八六〇	一、六〇〇	二、三〇一	一、九二〇	一
二心枯摘除	一、八七六	一、六六五	二、三三七	一、九六三	二
三枯穂摘除	一、八九〇	一、六七〇	二、三六六	一、九七五	三

前表ニ依レハ第四區ハ最モ被害ヲ輕減シ玄米收量モ亦多ク第三第二順次之ニ亞ケリ

本試験ハ玄米ノ貯蔵中其俵裝法ノ如何ニヨリ害蟲ノ蝕耗スル程度ヲ知ラントスルニアリ

(二)玄米貯蔵試験(自四十二年一ヶ年平均)  
至四十二年一ヶ年平均)

區別	玄米原重量ニ對スル減耗歩合			玄米原重量ニ對スル平均減耗歩合		
	四十年	四十一年	四十二年	四十年	四十一年	四十二年
新藁一重俵	〇、九九	〇、九四	〇、九四	〇、九四	〇、九四	〇、九四
古藁一重俵	〇、五一	〇、五三	〇、五三	〇、五一	〇、五三	〇、五三
改良二重俵	〇、二五	〇、一〇	〇、一〇	〇、二五	〇、一〇	〇、一〇
保米袋入俵	〇、一五	〇、二三	〇、二三	〇、一五	〇、一八	〇、一八

前表ハ第一回(七月二十日)及第二回(十二月二十日)ノ調査ヲ合算セルモノニシテ保米袋入俵ノ減耗量最モ少ク改良二重俵之ニ次キ一重俵中新藁ヲ用ヒタルモノ成績最モ不良ナリ

三麥類黑穂病豫防試験(自明治四十年三ヶ年平均)  
至明治四十三年三ヶ年平均)

本試験ハ明治四十年四月農商務大臣ノ命令ニ依リ麥類黑穂病豫防ノ效果如何ヲ試ミントスルヲ以テ目的トシ之カ試験ヲ施行セシニ其成績左ノ如シ



試驗年度	明治四十年		明治四十一年		明治四十二年		三ヶ年平均	
	被 害 量	收 量	被 害 量	收 量	被 害 量	收 量	被 害 量	收 量
大麥	豫防區 三、二七〇	二、四三六	無豫防區 一、五五〇	一、九五〇	一、二〇〇	一、五五五	二、六九五	一、九八六
小麥	豫防區 三、一七〇	二、二七〇	無豫防區 一、四九三	一、四〇四	一、二八七	一、四〇四	二、六九五	一、七三三
裸麥	豫防區 一、二〇七	一、六八四	無豫防區 一、〇八六	一、〇八六	〇	一、二二三	一、六八五	一、六八五
平均	一、六五〇	一、七七八	一、五三〇	一、五八四	〇	一、〇二八	一、四三六	一、四三六

備考 試驗畑ハ各區共五畝歩ナリ  
前表ニヨレバ大小裸麥ヲ通シテ豫防區ハ無豫防區ニ比シ其効果頗ル著シク即チ一反歩收量ニ於テ何レモ二斗以上ノ差アルヲ示セリ

(四) 二化性螟蟲發蛾時期調査(自明治四十二年) 五ヶ年平均

年次	第一期		第二期	
	發蛾初期	最盛期	發蛾初期	最盛期
明治四十二年	五月九日	六月三日	七月九日	八月二日
同四十二年	五月九日	六月三日	七月九日	八月二日
同四十三年	五月九日	六月三日	七月九日	八月二日
同四十四年	五月九日	六月三日	七月九日	八月二日
大正元年	五月九日	六月三日	七月九日	八月二日
平均	五月九日	六月三日	七月九日	八月二日

(五) 二化性螟蟲加害時期調査(自明治四十二年) 至大正二年

年次	發蛾初期	最盛期	發蛾初期	最盛期
同二年	五月九日	六月三日	七月九日	八月二日
平均	五月九日	六月三日	七月九日	八月二日

(六) 二化性螟蟲被害莖中存在蟲數調査(自明治四十二年) 至大正二年

年次	初 期		最盛期		終 期	
	發 生	枯 死	發 生	枯 死	發 生	枯 死
明治四十二年	六月三日	七月九日	七月九日	八月二日	八月二日	八月二日
同四十三年	七月二日	七月九日	七月九日	八月二日	八月二日	八月二日
同四十四年	七月二日	七月九日	七月九日	八月二日	八月二日	八月二日
大正元年	七月二日	七月九日	七月九日	八月二日	八月二日	八月二日
平均	七月二日	七月九日	七月九日	八月二日	八月二日	八月二日

枯穂發生期ニ被害莖ヲ切除シ一莖中ニ存在スル蟲數ヲ調査セルニ左ノ如シ

年次	白穂ノ出現シタル當時(第一期)		白穂ノ全部出現シタル當時(第二期)		白穂ノ全部出現シタル後二週間ヲ經過シタルトキ(第三期)	
	被 害 量	收 量	被 害 量	收 量	被 害 量	收 量
明治四十二年	五、〇八	一、二七	二、七九	〇、六二	〇、三〇	〇、六二
同四十三年	五、〇八	一、二七	二、七九	〇、六二	〇、三〇	〇、六二
同四十四年	三、七一	五、七〇	五、七〇	一、四七	一、四七	一、四七



年次	白穂ノ出現シタル當時(第一期)	白穂ノ全部出現シタル當時(第二期)	白穂ノ全部出現シタル後二週間ヲ經過シタルトキ(第三期)
大正二年	五、二四	四、六五	一、四七
同	三、七八	四、七三	一、二二
平均	四、四五	三、八三	一、〇一

### 五、委託試驗ノ部

(イ) 農商務省指定畑二毛作試驗

明治四十三年九月農商務省ヨリ本縣重要農作物中畑二毛作試驗施行命令トナリ同年度ニ於テ試驗地ノ撰定及準備ヲ爲シ翌四十四年度ヨリ試驗ニ着手大正四年度ニテ終了セリ而シテ試驗成績ハ目下調査中ナルモ試驗項目並ニ試驗地ヲ掲グレバ左ノ如シ

- 一、(馬鈴薯) 跡作 (大麥) 間作 (大小豆)
- 二、(大豆) 間作 (大麥) 間作 (馬鈴薯) 跡作 (秋蕎麥)
- 三、(春蒔大麥) 跡作 (蘿蔔、燕青)
- 四、(馬鈴薯) 間作 (住)
- 五、(青苜燕麥) 間作 (大豆、小豆)

- 六、(馬鈴薯) 跡作 (蘿蔔或ハ秋蕎麥)
- 七、(大豆) 間作 (大麥) 跡作 (蘿蔔或ハ秋蕎麥)
- 八、(大豆) 間作 (油菜) 跡作 (蘿蔔或ハ秋蕎麥)
- 九、(菜豆) 跡作 (大麥) 間作 (茄子、甘藍)
- 十、(蒟蒻、休菜) 跡作 (茄子) 間作 (青菜) 跡作 (午莠)
- 十一、(豌豆或ハ蔓無菜豆) 跡作 (蘿蔔)
- 十二、(胡瓜或ハ馬鈴薯) 跡作 (胡蘿蔔)
- 十三、(胡瓜) 跡作 (葱) 間作 (茄子)
- 十四、(胡瓜) 跡作 (大麥) 跡作 (葱)
- 十五、(枝豆) 跡作 (大麥) 間作 (西瓜、甜瓜)
- 十六、(秋蒔甘藍) 跡作 (大麥) 跡作 (蘿蔔)
- 十七、(晚枝豆) 間作 (大麥) 間作 (馬鈴薯) 跡作 (休菜)

### 二、試驗地

河邊郡仁井田村仁井田字下新田  
 仙北郡神宮寺町字本郷野  
 北秋田郡鷹巢町鷹巢

砂質壤土  
 砂質壤土  
 腐植質壤土



三、試験地ノ面積

一ヶ處五反步ツ、

ロ 本場畑二毛作試験

前記施行命令畑二毛作試験ハ大正四年度マデニ結了セルヲ以テ更ラニ大正五年度ヨリ左記個處ニ於テ試験ニ着手セリ今其試験項目ヲ掲クレバ左ノ如シ

一、試験項目

- 一、(馬鈴薯) 跡作 (大麥) 間作 (大小豆)
- 二、(春蒔大麥) 跡作 (蘿蔔)
- 三、(春蒔小麥) 跡作 (秋蒔麥)
- 四、(大豆) 間作 (大麥) 跡作 (蘿蔔)
- 五、(藍) 跡作 (大麥)
- 六、(大豆) 間作 (大麥) 間作 (茄子甘藍)
- 七、(大豆) 間作 (小麥) 跡作 (秋蒔麥)
- 八、(馬鈴薯) 間作 (菜類、蘿蔔)

二、試験地

仙北郡四ッ屋村

腐植質砂土

北秋田郡鷹巢町

三、試験地ノ面積

壹ヶ處四反步

ハ 泥炭地改良試験

本縣内泥炭地ニ於ケル稻作栽培上ノ改良ニ資センガ爲メ大正二年度ヨリ山本郡濱口村及平鹿郡吉田村ニ委託試験ヲ施行セリ然シテ前記濱口村試験地ハ惡水ノ排除頗ル困難ヲ極メ當該試験成績ノ的確ヲ得ル上ニ於テ支障尠カラザリシヲ以テ更ニ大正四年度ヨリ仙北郡中川村ニ移シ吉田村ニ於ケル試験成績判明セルニヨリ其ノ成績ハ直チニ平鹿郡ノ泥炭地ニ適合スルヤ否ヤヲ確メンカタメ更ラニ大正五年度ヨリ田根森村ニ移シ委託試験ヲ繼續スルコト、セリ

腐植質壤土

區名	平鹿郡吉田村				山本郡濱口村		仙北郡中川村	
	大正二年度	大正三年度	大正四年度	平均	大正二年度	大正三年度	平均	大正四年度
一、標準區	一、三六五	一、一七〇	一、一八五	一、二〇〇	一、〇七五	一、一〇五	一、〇九〇	一、一八三
二、窒素肥料區	一、七〇〇	一、八二五	一、二一八	一、五五八	一、〇六八	一、一三三	一、一〇一	二、二四七
三、速益燐肥區	二、二四六	一、八七四	二、七八三	二、三〇一	一、〇六一	一、一〇〇	一、〇八五	二、八五〇
四、蒸製骨粉區	一、八八〇	一、六〇五	二、二〇〇	一、八六五	一、〇五〇	一、三〇三	一、一七六	二、三八七



區名	平鹿郡			吉田村			山本郡			濱口村			仙北郡	
	大正二年	大正三年	大正四年	大正三年	大正四年	平均	大正二年	大正三年	大正四年	大正二年	大正三年	平均	大正四年	中川村
五、炭酸石灰區	一、六〇〇	一、四〇〇	二、〇〇〇	一、七〇〇	〇、六九〇	一、四三三	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二	一、〇六二
六、粘土容入區	一、六三三	一、三三四	二、五三三	一、八二七	一、五〇六	一、八二八	一、六六七	一、六六七	一、六六七	一、六六七	一、六六七	一、六六七	一、六六七	一、六六七
七、砂土容入區	一、四七六	一、四二六	二、〇三三	一、八三三	一、一〇六	一、五〇七	一、三二六	一、三二六	一、三二六	一、三二六	一、三二六	一、三二六	一、三二六	一、三二六
八、泥炭容入區	一、四七六	一、四二六	二、〇三三	一、八三三	〇、九〇六	一、三三三	一、二二五	一、二二五	一、二二五	一、二二五	一、二二五	一、二二五	一、二二五	一、二二五

右表ニ依レバ遠益磷肥區最モ優リ在來耕作法ニヨルモノ最モ劣ルヲ知ル元來泥炭地ハ諸種土壤中地産力最モ瘠薄ナルモノナルヲ以テ之レヲ耕作スルニ當リテハ排水施設ヲナスハ勿論適宜石灰等ヲ以テ有害物ヲ除去シ經濟的溶解性礦物質ヲ以テ肥料要素ヲ補充シ漸次深耕ヲナスト共ニ冬季風化セシメタル土壤ヲ客入スル等理化學的改善ノ道ヲ講ズルニ非ラザレバ到底見ラルベキ生産ヲ擧グル能ハザルモノトス

コ、ニ右表成績等ニ基キ反當施田スベキ三要素其他ノ最大限ヲ示セバ大凡左ノ如シ

- 窒素 貳貫目
- 磷酸 貳貫五百目
- 加里 貳貫五百目
- 消石灰 貳拾貫匁
- 客土量 拾立坪

(ニ) 果樹模範、病害豫防及肥料試驗

管内果樹栽培者ハ頻リニ増加シ其ノ反別亦激増ノ趨勢ヲ示スモ栽培技術ノ不完全ナルガタメ結果盛年ニ達セル果樹ヲシテ收穫皆無ナラシメ廢園ニ傾ケルモノ少ナカラズ故ニ本場ニ於テハ大正三年度ヨリ管内ニ左記試驗項目ニ基ク委託試驗地ヲ設置セリ

- 一、模範的栽培法試驗 (指定果樹園) 五ヶ處
- 二、苹果病害豫防試驗 一ヶ處
- 三、苹果及梨肥料試驗 三ヶ處

模範的栽培法試驗ノ成績左ノ如シ

所在地	樹種	年	樹	反當收量	同上收入	同上支出	同上損益	間作物收益
南秋田郡 脇本村	苹果	大正三年	三	三九、四〇〇	九、九九五	六、九五五	三、八〇〇	大豆 四、五〇〇
		大正四年	四	四三、六〇〇	一五、三三八	九、五〇〇	五、八〇〇	大豆 五、五〇〇
		大正五年	四	四一、五〇〇	一〇、〇〇〇	三九、〇〇〇	七、〇〇〇	小豆 二、〇〇〇
由利郡 本莊町	苹果	大正三年	四	三八、九〇〇	八三、二三〇	三六、〇〇〇	四七、二三〇	種子 一五、九七〇
		大正四年	三	一〇八、〇〇〇	五三、七五三	二五、〇〇〇	二八、七五〇	種子 一五、九七〇
		大正五年	四	一三八、〇〇〇	五六、〇〇〇	四三、六〇〇	一〇、三三〇	種子 一五、九七〇



所在地ノ	樹種	年	度	樹	齡	反當收量	同上收入	同上支出	同上損益	間作物收量
北秋田郡	苹果	三	大正	三	五	一、五五〇	一、〇〇〇	二、六九一	二、六九一	馬鈴薯
大館町	苹果	四	大正	四	六	一、五五〇	一、〇〇〇	三、三六〇	三、三六〇	馬鈴薯
鹿角郡	苹果	三	大正	三	七	三、六〇〇	三、〇〇〇	六、二六〇	三、三六〇	馬鈴薯及花
柴平村	苹果	四	大正	四	六	三、八〇〇	三、〇〇〇	三、八〇〇	三、三〇〇	大豆
雄勝郡	苹果	三	大正	三	四	九、〇〇〇	一、三二五	八、八〇〇	一、四六五	同
山田村	梨	三	大正	三	五	五、七六〇	一、三六〇	三、九六〇	一、五九〇	同
山田村	梨	四	大正	四	六	三、〇〇〇	一、〇〇〇	三、五〇〇	七〇、三〇〇	同

苹果花腐病豫防試験ノ成績

苹果花腐病豫防ニ對スル効果ハ硫酸銅液又ハ石灰ボルドウ液ノ發芽前撒布ハ有効ナルモノノ如シ

苹果及梨肥料試験

- 一、一要素多量試験
- 二、種類試験
- 三、肥料用量試験

- 四、石灰加用試験
- 五、施肥期試験

六、其ノ他ノ部

本場設立以來ノ成績報告書類ノ發刊配付  
場、農會、農業篤志者及關係官衙ニ配付シタリ

品名	號	發	刊	年	配	付	部	數
農事試驗成績	一	同	三	年	一	千	部	十
同上	二	同	三	年	一	千	部	十
同上	三	同	三	年	一	千	部	十
同上	四	同	三	年	一	千	部	十
農事委託試驗成績	一	同	三	年	一	千	部	十
農事試驗成績	五	同	三	年	一	千	部	十
同上	六	同	三	年	一	千	部	十
本縣重要農作物耕種ノ標準	一	同	三	年	一	千	部	十
蘭草栽培培法	一	同	三	年	一	千	部	十
農事試驗成績略報	一	同	三	年	一	千	部	十
秋田縣農事試驗場一覽	一	同	三	年	一	千	部	十







品名	號名	發行年	配付部數
畑二毛作調查報告	秋田縣ニ於ケル蔬菜ノ調査	三四年	百部
業務報告	二十報	四年	百部
業務報告	二十一報	五年	百部

ロ) 種苗配付

明治二十九年( )ヨリ明治三十三年マテ五ケ年間ハ本場試作物ニシテ成績良好ト認メタルモノハ毎年縣知事ノ許可ヲ受ケ之レヲ管内當業者ノ希望ニ應ジ配付シ來タリシガ明治三十四年四月秋田縣令第三十二號ヲ以テ種苗配付規則設定セラレシ以來大正二年ニ至ルマデ主トシテ普通種子ヲ管内當業者ノ希望ニ基キ配付セリ然ルニ大正三年ヨリ更ラニ配付種子ヲ原種及普通種ニ區分スル必要ヲ生ジタル結果同年二月ニ於テ右規則ヲ改正セラレタリ又規程以上ノ數量出願希望者ニ對シテハ其年ニ於ケル時價相場ニ基キ換算シ代價ヲ徴シ以テ配付ニ行ヒタリ今明治二十九年ヨリ大正五年マデ二十一ケ年間配付セル重要農作物種苗ノ名稱數量人員年別ニ舉グレバ左ノ如シ

無償配付

- 水稻
- 麥類
- 陸稻
- 大小豆
- 油菜
- 蘭苗
- 馬鈴薯
- 蔴
- 蔬菜苗
- 蔬菜種子

明治廿九年	明治三十年	明治卅一年	明治卅二年	明治卅三年	明治卅四年	明治卅五年	明治卅六年	明治卅七年	明治卅八年
一、二〇〇	二、六五〇	九、五〇〇	二、一〇〇	八、〇〇〇	一、二〇〇	一、一〇〇	一、一〇〇	二、五〇〇	六、四七〇
九、五〇〇	二、〇〇〇	五、〇〇〇	七、八〇〇	四、九〇〇	一、一七〇	三、〇〇〇	一、九〇〇	二、一〇〇	八、三六〇
一、〇〇〇	二、〇〇〇	四、〇〇〇	一、五〇〇	三、〇〇〇	二、〇〇〇	一、〇〇〇	二、九〇〇	一、〇〇〇	一、三〇〇
三、五二六	九、〇〇〇	一、九一六	一、五〇〇	七、五〇〇	二、七六五	六、二八〇	五、二四〇	二、六〇〇	一、四六五
一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇
五、〇〇〇	九、二七〇	二、五七〇	一、五七〇	六、七六〇	一、七三〇	五、四〇〇	三、九〇〇	五、〇〇〇	六、五〇〇
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人







爾來明治三十四年一月ヨリ毎年農閑ノ季節ヲ利用シテ管内各郡請求ニ應ジ講習會ヲ開設セシメ専ラ場員ニシテ當業者ニ農業上ノ智識ヲ注入スルニ努メタリ然ルニ遂年講習希望増加ノ趨勢ニ伴ヒ更ラニ明治三十七年十一月秋田縣告示第六百廿六號ヲ以テ規程ヲ改正セラレ即チ科目ヲ農業、蠶業、畜産業、林業ノ四科トナシ明治四十二年十二月マデ管内各郡ニ之カ講習ヲ開催シ而シテ蠶業、畜産ノ三科ニ對シテハ縣ヨリ夫々技術員ヲ派遣セリ其後明治四十三年六月縣產業講習規程發表ト共ニ自然本場短期講習規程ハ廢止トナリタルモ講習ハ依然縣產業講習規程ニ基キ場員ヲ派遣シ來レリ今明治三十四年ヨリ大正五年十二月マデ十六ヶ年間管内各郡ニ開始セル個處及修得人員ヲ舉グレハ左ノ如シ

年次	農業科		蠶業科		畜産科		林業科	
	個所	修得人員	個所	修得人員	個所	修得人員	個所	修得人員
明治三十四年	1	141	1	1	1	1	1	1
同三十五年	1	104	1	1	1	1	1	1
同三十六年	1	256	1	52	1	1	1	1
同三十七年	1	367	1	52	1	1	1	1
同三十八年	1	67	1	348	1	1	1	1
同三十九年	1	99	1	469	1	1	1	1
同四十年	1	97	1	382	1	1	1	1
同四十一年	1	30	1	396	1	1	1	1
同四十二年	1	62	1	396	1	1	1	1

年次	農業科		蠶業科		畜産科		林業科	
	個所	修得人員	個所	修得人員	個所	修得人員	個所	修得人員
同四十二年	1	87	1	3	1	1	1	1
同四十三年	1	65	1	3	1	1	1	1
同四十四年	1	508	1	3	1	1	1	1
同四十五年	1	82	1	3	1	1	1	1
大正元年	1	183	1	3	1	1	1	1
大正二年	1	197	1	3	1	1	1	1
大正三年	1	118	1	3	1	1	1	1
大正四年	1	546	1	3	1	1	1	1
大正五年	1	3	1	3	1	1	1	1

實地指導

本場ニ於ケル實地指導ノ主ナルハ馬耕傳習、蘭莖製造傳習、農事必行事項ノ指導及果樹剪定其他ノ指導ナリ而シテ馬耕傳習ハ明治三十年五月ヨリ四十二年度マデ管内各町村ノ希望ニ基キ本場技術員ヲ派シテ傳習セシメ又蘭莖製造傳習ハ明治三十一年ヨリ專門技術者ヲ置キ農閑期ヲ見計ヒ本場内ニ於テ蘭莖製造傳習ヲ開始シ他蘭莖製造組合若シクハ當業者ノ請求ニ應ジ技術員ヲ派遣シテ傳習セシメ明治三十六年度ヨリ之ヲ廢止セリ

農事必行事項タル乾田馬耕、種籽鹽水撰、稻正條植、除草器ノ使用、堆肥ノ改良、稻架乾燥、苗代改良、畑二毛作、病蟲害ノ驅除豫防等ニ就テハ明治三十八年五月ヨリ縣内九郡ヲ中央、北部、南部ノ三區ニ分チ各區ニ技手一名指導教師二名ヲ常時派



遣シテ之ガ實地指導ニ當ラシメ更ニ明治四十一年度ヨリ技術員ヲ増員シテ專ラ指導獎勵ヲ加ヘ明治四十三年度ヨリ之ヲ縣ヘ移セシ果樹園藝ノ實地指導ハ從來ヨリ多少之ヲ實行シ來リシモ大正二年以前ニアリテハ之ガ專門技術者ヲ缺キシ結果實地指導トシテ著シキモノアルヲ見ズ然ルニ該年度ヨリ專門技術員ノ常置スルノ機運ヲ迎ヒ又一方縣下ニ於ケル果樹栽培モ最近ニ於テ急進ナル發達ヲ遂グルニ至リタルヲ以テ之ガ實地指導ヲ要望スルモノ年ト共ニ多キヲ加ヘ前途斯業ノ秩序的發達ヲ見ルニ從ヒ益々斯種ノ指導ヲ必要トスルニ至ルベシ

ホ 質 問 應 答

農事ニ關スル各種ノ質問應答ハ農業者ノ技術的研鑽ニ伴ヒ年次其多キヲ加フルハ斯業啓發ノ爲メ眞ニ嘉賞スベキノ現象ニシテ進ンデ本場ノ之ガ應答ニ吝ナラザル所以タリ而シテ左表ハ單ニ文書ニ依リ一部應答セル件數ニシテ此他大部分口答ヲ以テ直接來觀者ヘ應答セルモノハ之ガ記入ヲ缺ケリ

年 度	件 數	年 度	件 數
明治二十八年		明治三十九年	一三
同二十九年		同四十年	一四
同三十年		同四十一年	一三

（一） 縱 覽 人 員

年 度	人 員	年 度	人 員
同 一 年	一三	同 四 十 二 年	一一
同 二 年	一八	同 四 十 三 年	一四
同 三 年	二一	大 正 元 年	四一
同 四 年	二二	同 二 年	五〇
同 五 年	二二	同 三 年	七九
同 六 年	二三	同 四 年	一〇三
同 七 年	二九	同 五 年	一〇四
同 八 年			

年 度	人 員	年 度	人 員
明 治 廿 八 年	八一	明 治 卅 六 年	九一
同 廿 九 年	九六	同 卅 七 年	九六
同 卅 一 年	六五	同 卅 八 年	六五
同 卅 二 年	五一	同 卅 九 年	五一
同 卅 三 年	九九	同 卅 十 年	九九
同 卅 四 年	七九	同 卅 十 一 年	七九
同 卅 五 年	一〇五	同 卅 十 二 年	一〇五
同 卅 六 年	一〇五	同 卅 十 三 年	一〇五
同 卅 七 年	七三五		



















終

